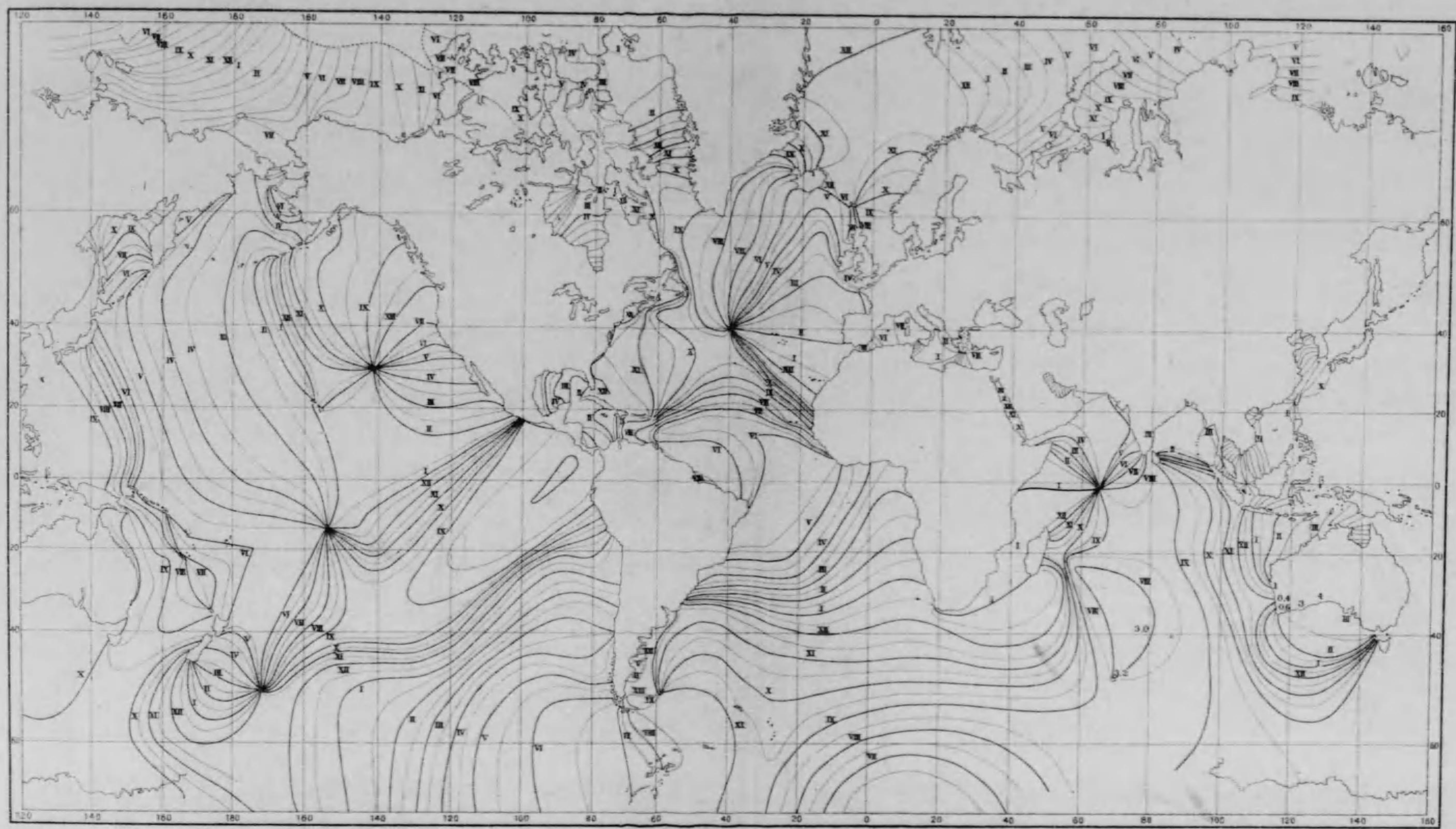


3,05 (10,00)  
 2,10 ( 7,00)  
 4,19 (13,75)  
 7,09 (23,25)  
 9,53 (31,25)  
 6,71 (22,00)  
 5,49 (18,00)  
 3,36 (12,00)  
 2,74 ( 9,00)  
 3,36 (12,00)  
 3,36 (12,00)  
 2,44 ( 8,00)  
 3,36 (12,00)  
 2,74 ( 9,00)  
 1,30 ( 4,25)  
 2,36 ( 7,75)  
 0,38 ( 1,25)  
 0,38 ( 1,25)  
 0,38 ( 1,25)  
 0,31 ( 1,00)  
 0,38 ( 1,25)  
 0,76 ( 2,00)  
 1,14 ( 3,75)  
 0,38 ( 1,25)  
 0,31 ( 1,00)  
 0,46 ( 1,50)  
 0,38 ( 1,25)  
 1,45 ( 4,75)



第 百 九 圖

持ッテ居ル地點

ヲ結付ケレバ同潮時線ガ得ラレル。而シテ一般ニ月ガぐりにちノ標準子午線ヲ經過シテカラノ太陰時間數ヲ以テ表ハス。今月ガ地球ヲ一周スルニ要スル時間ハ即チ一太陰日デ、凡ソ平均太陽日ノ24時50分ニ當リ、其二十四分一ハ即チ一太陰時デアル。故ニ同潮時ガ六時ナレバ月ガぐりにちノ子午線ヲ經過シテカラ太陰時デ六時間デ高潮トナルノヲ云フノデアル。第百九圖ハローらん(M. Rollin)及はりす(A. Harris)ノ作ツタ半日週潮ノ同潮時線デアル。

同潮時線圖ヲ見レバ潮波ガ如何ナル方向ニ進行スルカ、知ラレル。概シテ大洋ノ中ハ同潮時線ノ間隙ガ疎クテ潮波ノ速度ガ大ナルヲ示シ、大陸島嶼ハ其進行ヲ阻止スル爲メ、同潮時線ノ間隙ガ密デアル。從テ海峡ヤ内海ナドデハ同潮時線ガ極テ複雑デ、或ハ兩方カラ潮波ガ進入シテ來タリ、又ハ島嶼ナドデハ其周圍ヲ回轉スルコトモアル。

我國ノ沿岸デハ北太平洋ニ生ジタ潮汐ガ南西ニ向テ推寄セ、其千島列島ニ於ケル同潮時ハ東經135°ノ子午線ヲ月ガ經過スル時間ヲ起點トシテ二時デアル。而シテ其九州東岸及臺灣ノ東岸ニ達スルノハ七時デアル。

我國ノ南西諸島カラ支那東海ニ向フ潮波ハ方向

ヲ北西方ニ轉ジ、同潮時ハ七時半カラ始リ九州ノ西海岸ニ沿ヒテ北西進シ、朝鮮半島ノ西ヲ掠メテ黃海カラ終ニ渤海ニ入ル。此ノ潮波ノ中ニハ南ノ方臺灣ノ西岸ヲ南進シテ臺灣呂宋間ヲ北進シタモノト臺灣海峡デ合スルモノト、對馬海峡ヲ經テ日本海ニ入ルモノトアル。

支那東海カラ日本海ニ入ツタ潮波ハ九州ノ北岸及本州ノ北西岸ヲ進行シ、朝鮮南東岸ニ沿ヒテ南西ニ進ミ、日本海入口ノ中央ヲ中心トシテ十二時間デ時計ノ針ト反對ノ方向デ一回轉スル。

日本海ノ潮汐ハ主トシテ對馬海峡カラ入り來ル所ノ潮波ニ支配セラレ、沿岸ノ潮程ハ甚ダ小デ0,30米内外ニ過ギス。津輕海峡カラ太平洋ノ潮波ガ進入シ來テ前ノ南西カラ來ル潮波ト相會シ、宗谷海峡デハおほつく海カラ來ル潮波ト相會スル。而シテ日本海ハ北進スル程其幅ト深サガ減ズル爲メ、次第ニ潮程ヲ増加シ、間宮海峡附近デ大潮升2,74米(9呎)トナツテ居ル。

千島列島カラ北西ニ進ム潮波ハ樺太島ノ東岸ニ沿ヒテ進ンデ居ル。

瀬戸内海ノ潮汐ハ東ノ方紀伊水道カラ來ルモノト、西ノ方豊後水道カラ來ルモノト二ノ潮波ガアツ

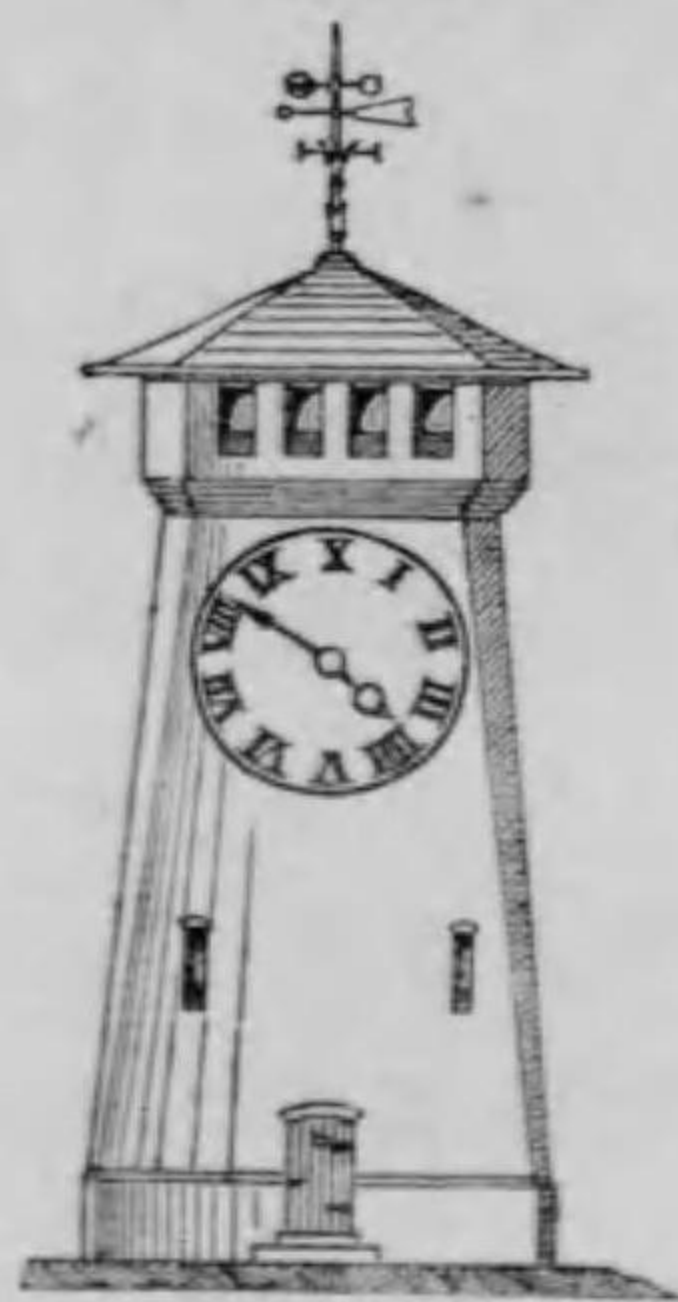
テ讃岐ノ粟島附近デ相會シテ居ル。紀伊水道カラ入込ムモノハ同潮時六時ニ此水道ニ入り、友ヶ島水道カラ七時半ニハ明石海峡ニ達スル。淡路島ノ西ニハ有名ナル阿波ノ鳴門ガアリ、淡路島ト阿波トノ間ヲ扼シテ居ル。此狭イ水道ハ急ニ幅ガ狭クナツテ居ル爲メ、急ナル潮流及渦卷ヲ生ジ舟楫覆没ノ危険ガアル。豊後水道カラ入ルモノハ一派ヲ西ニ出シテ、其主ナルモノハ東ニ向ヒ前ノ西來ノ潮波ト合スル。而シテ西セル一派ハ同潮時九時ニ下關海峡東口ニ達スル。此海峡ハ其水路迂曲セル外ニ其廣狭一ナラザル爲、或ハ渦流反流等ヲ生ズル。殊ニ東口ノ潮汐ハ西口ニ比シテ大ナル爲、東口ノ高潮及低潮ノ時、海峡ノ兩口ニ於ケル水位ノ差ガ略ボ最大トナリ、東口ノ高潮ノ時ハ潮流ガ最大ノ東流トナリ、其低潮ノ時最大ノ西流トナル。而シテ其流速ハ七湮ノ大ニ達スルコトガアル。

160 潮位ノ觀測 潮汐ハ時間ヲ定メテ其高ヲ觀測シ、其變化ノ状態ヲ知ルコトガ出來ル。其最モ簡單ナルモノハ河川ノ水位觀測ニ用フル量水標ト同構造ノモノデ、一般ニ檢潮器ト呼ンデ居ル。其簡單ナルモノニハ桿狀檢潮器ヤ函狀檢潮器ナドノ種類ガアル。前者ハ目盛シタ尺度ヲ海中ニ建テタニ過

ギナイカラ、波浪ノ有ル時ハ目盛ヲ讀ムニ困難デア  
ル。後者ハ函形ノ中ニ浮子ヲ浮シテ其上ニ目盛シ  
タ尺度ヲ附シ、函ノ下部ニハ外水ニ通ズル小孔ヲ穿  
チ、尺度ノ浮沈ヲ讀取ルモノデア。孰レニシテモ  
一定時間毎ニ尺度ヲ讀取ルノデ誤讀ナドノ有ルコ  
トヲ免レ得ヌノミナラズ、夜間ノ觀測ハ可ナリ面倒  
デア。

潮汐ノ如キ絶エズ水位ノ變化スルモノハ河川ノ  
如ク、洪水ノ場合ニノミ水位ガ多ク變化スルモノト  
ハ違ツテ、之ヲ自記スル設備ヲ用フルヲ便トスル、自  
記檢潮器即チ是デア。自記檢潮器ハ第三章第七  
節 [79]ニ述ベタ自記水位計ト同一デ、紙上ニ自記セ  
シメタ所ノ海水々位ノ變化ヲ表ス圖ヲ潮汐圖ト呼

第 百 十 圖



第 百 十 一 圖



ンデ居ル。自記檢潮器ニハ種々ノ型ガアル。第百  
十圖及第百十一圖ニ示シタモノハ港内碇泊ノ船舶  
ナドニ水位ヲ知ラスル處ノ塔内ニ高ク設ケタル水  
位時計及水位帶デ、孰レモ浮子ニ依ツテ昇降又ハ回  
轉スル。

161. 平均水位 陸上ノ高低ヤ海底ノ深淺ハ一般  
ニ海水面ヲ基礎トシテ高サ又ハ深サヲ表スノヲ通  
例トスル。然ルニ海水面ハ前ニ述ベタ通り潮汐ト  
シテ昇降スル許リデナク、風ニ依リ、又ハ時季ニ依ツ  
テ異同ガアル。然シ相當ニ永イ期間ヲ擇ンデ、其中  
暴風海嘯ナドノ偶發ノ原因ニ依ルモノヲ除外シテ  
水位ノ平均ヲ作レバ、廣大ナル區域ニ涉ツテ略ボ一  
定シタ水平面ガ得ラレル。之ヲ平均水位ト呼ブ。

然シ平均水位ニ就テ考フベキ他ノ影響ガ少クナ  
イ、即波浪ノ影響ガ其一デア。一上一下海水面ハ  
一日ノ間デモ幾回トナク、波浪ノ爲ニ昇降スルガ、然  
シ是モ多數ノ觀測ヲ平均スレバ眞ニ近イ平均水位  
ガ得ラレル。

潮汐ノ影響モ勿論平均水位ヲ見出スニ當リ障害  
ヲ與フル他ノ原因デア。然シ潮汐ハ非常ニ規則  
正シク去來スルノデ、永イ間ノ觀測ヲ平均スレバ所  
謂眞ノ平均水位ガ得ラレル筈デア。月ト太陽ト

ノ關係的位置ハ凡ソ18年 $11\frac{1}{3}$ 日又ハ $12\frac{1}{3}$ 日デ再ビ元ニ還ルカラ、此期間丈ケ潮汐ノ觀測ヲ續ケレバ、日潮月潮ノ有ラユル組合セガ得ラレル譯デアアル。

波浪ヤ潮汐ノ如ク週期ヲ持ツテ居ルモノハ前ノ如ク永イ期間觀測スレバ、正負交々相消去シテ所謂平均ノ値ヲ得ラレルガ然シ非週期的原因カラ來ルモノハ影響ヲ抹殺スルコトガ困難デアアル。風、氣壓其他ノ氣象カラ來ルモノガ是デアアル。

風殊ニ強イ風ガ吹續クトキハ屢海水位ヲ變化セシメテ月平均水位ヲシテ是ガ爲ニ年平均水位ヨリモ數十種高カラシメ又ハ低カラシメタ例ハ少クナイ。即西風ノ多イ西海岸デハ水位ガ高メラレ、偶東風ガ多イ月ニハ之ニ反シテ水位ガ低クナル。

氣壓ガ海水位ニ及ス影響ニハ殊ニ著シキモノガアル。夏ノ間ハ氣壓ガ低ク從テ海水位ハ高イガ、冬ハ氣壓ガ高ク、海水位ガ低イ。我國ノ沿岸デハ一月乃至四月ニ水位最モ低ク、七月乃至十月ニ最モ高ク、其差30種内外ニ達スル處ガ多イ。八朔潮ナド、云ツテ海岸ノ住民ガ恐ヲ爲シテ居ルノハ全體トシテ夏ノ潮ガ高イノニ、若シ一朝暴風雨ナドノ爲ニ更ニ水位ガ上昇シ殊ニ上ケ潮ノ際ニ稍モスレバ海堤ヲ踰エテ高潮ガ浸入スルコトガ有ル爲デアアル。

一般ニ天氣氣候ナドノ爲ニ或年ノ平均水位ト次年ノ平均水位トハ同一デナイ。此年平均水位ノ差ハ8種カラ14,5種位迄ノ間觀測セラレテ居ル。更ニ永期ニ涉ツテ海水位ノ變化モ亦起リツ、アル様デアアル。蓋シ氣象ノ永期變化ヤ地球自身ノ變形ノ影響ヲ受ケテ海水位ハ徐々ニ變化シツ、アルノデアアル。

地殼ガ徐々ニ變化スル結果トシテ嘗テ海底ニ在ツタモノガ陸上ニ露ハレタリ、又ハ之ニ反シテ陸上ノモノガ海中ニ沒シタ様ナ例ハ少クナイ。近年我國ナドデモ本州南部、北海道北西岸及東岸等ハ其平均水位上昇シ、其他ノ所デハ沈下シツ、アルト云フコトデアアル。北九州ノ西海岸デモ所ニヨリ海底ノ岩石ガ徐々海面上ニ露出スルニ至ツタ所ガアル様デ、此等ハ主トシテ附近ノ土地ガ昇降スルニ起因スルモノラシイ。唯此地殼ノ變形カラ起ル陸上ノ海面カラノ高サハ變化ヲ見ルニシテモ海水面ト平均水位トニハ關係ガナイ譯デアアルカラ、是ハ寧ロ陸地ノ高サノ變化ト云フ點カラ考フルヲ至當トスル。

氣象ノ永期變化ハ十年二十年ノ觀測カラ之ヲ消去スルコトハ困難デアアル。從テ平均水位ナルモノハ精々精密ニ測定シテモ數種ノ範圍内ニ一定セル

モノト云フ外ハナイ。

此外海流ノ方向ノ變化ナドモ多少平均水位ニ影響ヲ持ツテ居ルケレドモ極メテ微小ナルモノデア  
ルヲシイ。

輓近水準儀モ精巧ナルモノガ作ラレ、其高低測量ノ方法モ亦益精密ヲ加フルニ至ツタ爲メ、遠ク離レテ居ル海洋ノ平均水位ヲ比較スルコトモ亦從テ信ヲ措クニ足ル様ニナツテ來タ。然シ尙絕對ニ各種ノ誤差ヲ消去スルコトハ困難デ、海洋平均水位ノ高サノ差ナルモノモ屢此推差ノ範圍内ニ隱レテ了フコトガ少クナイ。

らるまんど (Ch. Lallemand) ハ太西洋及地中海ノ平均水位ヲ研究シテ其差7.5呎ヲ得タガ、是モ推差ノ範圍内ニ在ル。歐羅巴北部ノ東海、北海及太西洋ノ平均水位ハ其差30呎ニ達シナイ。例ヘバらるまんどノ調査ニ依レバ北海ノおすたんど (Ostende) 及地中海ノ平均水位ハ其差僅ニ15呎デア  
ルガ、是トテモ又推差ノ中ニ在ル。

北米合衆國デちとまん (O. H. Tittmann) 及ヘーふー  
るど (J. F. Heyford) ガ大仕掛ノ精準測量ヲ用ヒテ、太平太西兩洋ノ平均水位ノ差ヲ測定シタ所ニ依レバ19呎ニ達セズ、太西洋岸に  
よーく附近ノさんちー

ふっく (Sandy Hook) トめきしこ灣北部ノがるべすとん (Galveston) トノ平均水位ノ差ハ4呎未滿デア  
ル。此等ノ場合ニモ水準測量ノ距離ガ大ナル爲メ其誤差モ亦大ナルベキハ當然デア  
ル。

162. 基準面 陸上ノ高サ又ハ海中ノ深サヲ表ハスニ用フル水準面ヲ一般ニ基準面又ハ水準基面ト呼ブ。各國共基準面ハ其標準ヲ異ニシテ居ルノミナラズ、目的ニ依ツテ異ナル基準面ヲ用ヒ、又ハ假ニ基準面ヲ定メテ之カラ高低深淺ヲ定メ、他日眞ノ基準面トノ關係ヲ見出ス場合モアル。

英國ノ基準面トシテ陸軍地圖ニ用ヒテアルモノハ1844年三月ニ行ツタリばーぶーるノ潮汐觀測カラ得タ平均海水位デ、其おーるどどく (Old Dock) ノ開闢ヨリ4.67呎ノ上ニ在ツテ、之ヲおるどなんすでーたむ (Ordnance datum) ト呼ンデ居ルガ、然シ今日ノ平均水位ニ比較スレバ多少ノ差ガアル。此外ろんどんどつくノ入口ニ立テ、アルとりにちーでーたむ (Trinity datum) ハ大潮ノ平均高水位ヲ取ツタモノデ、是モ亦用ヒラレテ居ル。佛蘭西ノ基準面ハ1885年二月一日カラ1895年一月一日マデノまるせーゆニ於ケル平均水位ニ2呎内ニ符合シテ居ル。白耳義ノ基準面ハ1878年カラ1885年ニ至ル間ノおすたん

ニ於ケル北海ノ平均水位ニ等シク、船渠ばっさんち、こ  
んめるす (Bassin du Commerce) ノ閘閘ヨリ 3,658 米ノ上  
ニ在ルガ、1878 年カラ 1905 年マデ 27 年間ノ平均水位  
ハ前ノ水位ヨリ 0,6 糎丈ケ高イ。和蘭デハ 1701 年カ  
ラ 1871 年ニ至ル 170 年間ノあむすてるだむニ於ケ  
ル平均水位カラ 16,2 糎丈高イ水平面ヲ基準面トシ、  
之ヲ *A.P.* ト名ケテ居ル。ぶろじやデハ東海ト北海  
ノ平均水位ヨリ若干糎高イ水平面ヲ基準面トシテ  
凡テノ水準測量ノ基礎トナシ、之ヲ *N.N.* ト呼ビ、伯林  
ノ天文臺内ニ其據標ヲ樹テ、居ル。獨逸北部ノ諸  
港灣ノ平均水位ハ皆此 *N.N.* ヨリ下ニ在ル。埃甸國  
デハ其基準面ヲとりえすとノ檢潮器ノ零ニ取ツタ。  
1875 年カラ 1879 年及 1901 年カラ 1904 年 (1878 年一月  
及二月ヲ除ク) ノ八年間ノとりえすとニ於ケルあど  
りやち、く海ノ平均水位ハ此基準面ヨリ凡ソ 9 糎高  
イ。北米合衆國太西洋沿岸デハ平均低潮面ヲ基準  
面トシ、太平洋沿岸及めきしこ灣デハ平均低々潮面  
ヲ基準面トシテ居ル。

英國海軍デハ印度及支那沿岸ニ於テ平均水面以  
下或深<sup>\*</sup>ノ水平面ヲ基準面ニ撰ビ、之ヲ印度大低潮面

\*太陰半日週潮  $M_2$ 、太陽半日週潮  $S_2$ 、日月合成日週潮  $K_1$  及太陰  
日週潮  $O$  ノ半潮程ヲ夫々  $H_m$ 、 $H_s$ 、 $H_f$  及  $H_o$  トスレバ或深トハ  
 $H_m + H_s + H_f + H_o$  ナリ。陸上ノ高サヲ示スニ用フル平均水  
面上ノ或高サモ亦同一ナリ。

(Indian Spring Low Water Mark) ト呼ンデ居ル。我海軍  
デ用ヒテ居ルモノハ亦此基準面デ、海圖ニ陸上ノ高  
サヲ示セルモノハ更ニ平均水面カラ或ル高サノ基  
準面ヲ用ヒテ居ル。而シテ我參謀本部陸地測量部  
ガ用ヒテ居ル基準面ハ所謂中等潮位デ、參謀本部ノ  
水準點ヨリ下 2,487 米ニ當リ、又靈岸島檢潮器ノ零位  
(*A.P.*) ハ陸地測量部中等潮位ヨリ 1,112 米ノ下ニ在ッ  
テ略ボ最低干潮面ニ等シク、亦此方面ノ河川港灣等  
ノ基準面ニ用ヒラレテ居ル。

163. 潮汐ノ調和分解 潮汐ノ高ト時間トヲ豫  
メ知ルコトハ航運ニ關係スルモノニ必要ナル許デ  
ナク、港灣ノ凡テノ事業ニ甚ダ肝要デアアル。然ルニ  
潮汐ハ色々ノ不等ガアツテ極テ複雑ナル現象デア  
ルカラ、之ヲ豫知スルコトハ容易ノ業デナイ。西曆  
第 13 世紀ノ頃ニ既ニろんどんノ潮汐表ガ出來、1682  
年ニハふらむすてーど (Flamsteed) ノ翌 1683 年ニ對ス  
ルろんどん ぶりっちニ於ケル潮汐表ガ初メテ出版  
セラレタ。勿論此等古代ノ潮汐表ハ實驗的ノモノ  
デ、理論ニ依ツタモノデハナイ。

然ルニ今或地ノ潮汐ハ一個ノ太陰ヤ太陽ノミニ  
依ツテ起ルモノデナク、多クノ天體ヲ假想シ、各假想  
天體ハ各自ニ規則正シキ小潮汐即チ分潮ヲ起シ、是

等ノ分潮ガ種々ノ組合セヲ爲ス爲メ實際ノ潮汐ヲ作ルモノダト考フルコトガ出來ル。普通ニ必要ナルモノハ20餘個ノ分潮デ、各分潮ヲ起ス天體ガ子午線ヲ經過シテカラ高潮トナル迄ノ時間及潮程ハ夫々一定ノモノデアアル。斯クノ如ク潮汐ヲ規則正シキ多クノ分潮ニ分ケルコトヲ潮汐ノ調和分解ト云ヒ、其論據トスル處ハ亦實驗的ナルヲ失ハナイガ、今日ノ數學ノ力デハ是以上ニ出ルコトハ出來スト考ヘラレテ居ル。

月ヤ太陽ノ潮汐ヲ生ズル力ハ其必要ノ精度ニ應ジテ種々ノ週期ヲ持ツタ若干ノ函數ヲ以テ表シ得ベク、一般ニ週期ヲ $\tau$ トスレバ起潮力ハ簡單ナル圓函數  $A \cos 2\pi \frac{t}{\tau} + B \sin 2\pi \frac{t}{\tau}$  ナル形ノ若干個ヲ以テ表スコトガ出來ル。茲ニ $A$ 及 $B$ ハ定數デ、 $t$ ハ時間デアアル。又週期 $\tau$ ノ中ニハ $\tau_1, \tau_2$ 等ノ原調モアレバ  $\frac{1}{2\tau_1}, \frac{1}{3\tau_1}, \dots, \frac{1}{2\tau_2}, \frac{1}{3\tau_2}, \dots$  等ノ上調モアリ、又  $\frac{1}{\tau'} = \frac{1}{\tau_1} - \frac{1}{\tau_2}$   $\frac{1}{\tau''} = \frac{1}{\tau_1} + \frac{1}{\tau_2}, \dots$  等ノ合成調モアル。殊ニ潮汐ノ潮程が大ナルトキハ是等ヲ考ヘナケレバナラス。故ニ起潮力ノ週期ヲ $\tau_1, \tau_2, \tau_3, \dots, \tau_n$ トスレバ一點ニ於ケル潮汐ノ高 $h$ ハらぶら一すノ所説ニ從テ

$$h = A_1 \cos 2\pi \frac{t}{\tau_1} + B_1 \sin 2\pi \frac{t}{\tau_1} + \dots + A_r \cos 2\pi \frac{t}{\tau_r} + B_r \sin 2\pi \frac{t}{\tau_r}$$

$$\dots + A_n \cos 2\pi \frac{t}{\tau_n} + B_n \sin 2\pi \frac{t}{\tau_n} \quad [148]$$

ヲ以テ表スコトガ出來ル。 $A_1, B_1$ 等ハ或一定ノ場所ニ就テハ常數デアルケレドモ、他ノ場所ニ就テハ異ル値ヲ持ツテ居ル。即チ $A_1, B_1$ 等ハ位置ノ函數デアアル。從テ今日デハ各地ニ就テ其潮汐ノ觀測カラ夫々是等定數ノ數值ヲ見出スヨリ外ニ方法ハナイ。

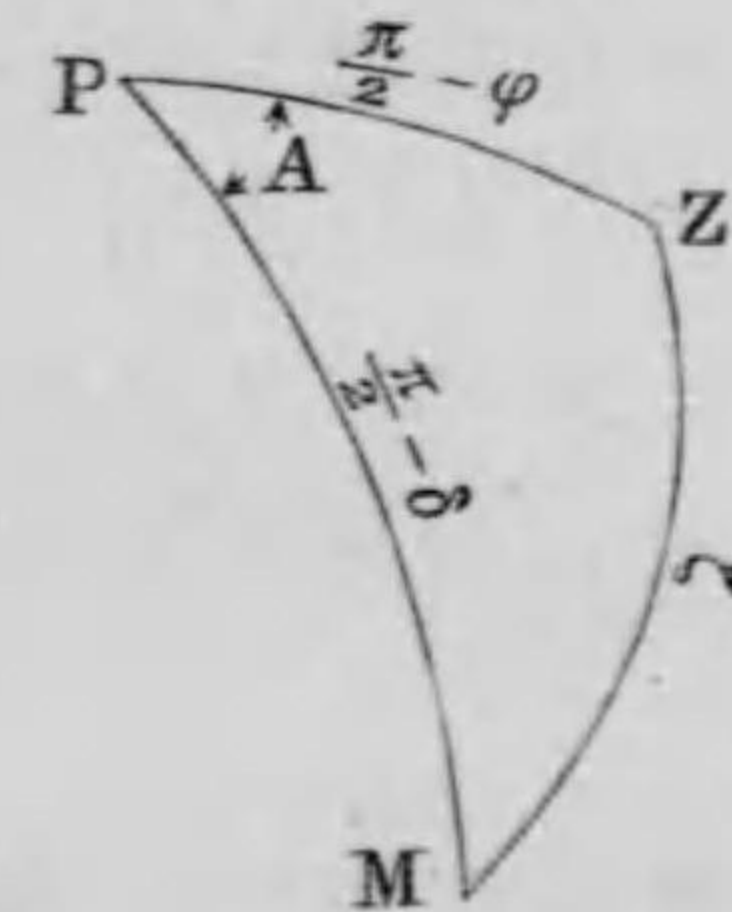
164. 分潮ノ週期 潮汐ヲ生ズル諸力ハ一ノぼてんしやるヲ持ツテ居ルコト嘗テ述ベタ如クデアアルガ、諸力ハ位置ノ函數カラ成ル微分等式デ表ハサレ、其一般的解法ハ困難デアアル。然ルニ又諸力ハ其ぼてんしやるト全然同一ナル關係ヲ時間ニ對シテ持ツテ居ルカラ、週期ノ研究ハぼてんしやるニ依ラナケレバナラス。而シテ月ノぼてんしあるハ最モ潮汐ニ關係深ク、太陽ハ比較的の影響ガ小デアアル。

地表ニ潮汐ヲ生ズル所ノ月ノぼてんしやる $V'$ ハ [144]ニ示シタ如ク

$$(1) V' = km \frac{R^2}{r^3} \left( \frac{3}{2} \cos^2 \zeta - \frac{1}{2} \right)$$

今第百十二圖ニ於テ $P$ ヲ極、 $Z$ ヲ與ヘラレタル一點ノ天頂、 $M$ ヲ地球ト月ノ中心ヲ連ヌル直線ガ天球ヲ貫ク點トスレバ

第百十二圖





球面三角  $PZM$  = 於テ  $\angle ZPM = \angle A$  ハ月ノ時角,  $\delta$  ヲ月ノ赤緯,  $\varphi$  ヲ與ヘラレタル一點ノ緯度トセバ,

$ZM = \zeta, PZ = \frac{\pi}{2} - \varphi, PM = \frac{\pi}{2} - \delta$  デ, 球面三角ノ理カラ

$$(2) \quad \cos \zeta = \sin \varphi \sin \delta + \cos \varphi \cos \delta \cos A$$

及

$$(3) \quad \cos^2 A = \frac{1}{2} + \frac{1}{2} \cos 2A$$

デアルカラ, 之ヲ(1)ニ代用スレバ

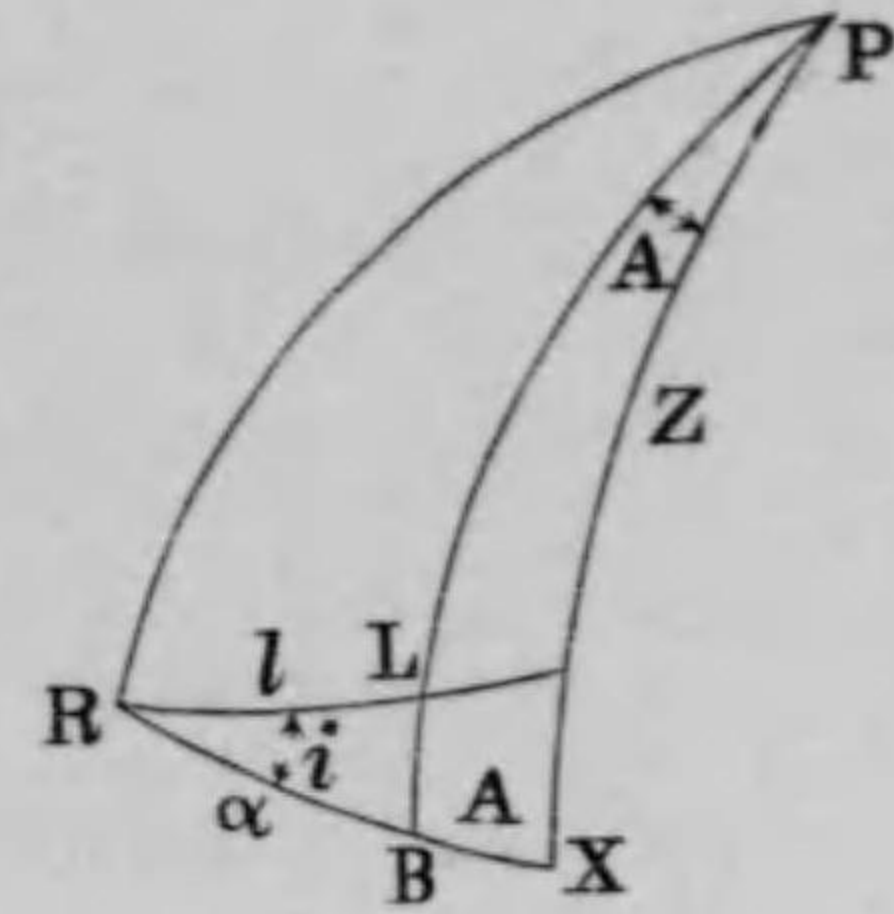
$$V' = \frac{3}{4} km \frac{R^2}{r^3} \left[ \cos^2 \varphi \cos^2 \delta \cos 2A + \sin 2\varphi \sin 2\delta \cos A + \frac{(1-3 \sin^2 \varphi)(1-3 \sin^2 \delta)}{3} \right] \quad [149]$$

$\varphi$  ハ地上ノ與ヘラレタル一點ニハ一定デアルケレドモ,  $A$  及  $\delta$  ハ月ノ位置ニ依ツテ變化スル. 而シテ一太陰日ノ間ニ  $A$  ハ  $0^\circ$  ト  $360^\circ$  ノ間ニ變化シ,  $\delta$  ハ平均27日7時43分4.7秒ノ間ニ一最大ト一最小ノ間ニ變化スル. [149] 中ノ  $\cos 2A$  ヲ含ム所ノ第一項ハ半日週潮ニ應ズルモノデ,  $\cos A$  ヲ含ム第二項ハ日週潮ニ應ジ, 全然  $A$  ヲ含マザル第三項ハ半月及月週潮ニ應ズルモノデアル. 是等ノ中第一項ハ勿論最大ナル潮汐ニ關スルモノデ最モ肝要ナルモノデア

ル. 次ニ第百十三圖ニ於テ,  $P$  ヲ天球ノ極,  $RX$  ヲ赤道,

第百十三圖

$RL$  ヲ月  $L$  ノ軌道ヲ含ム平面ト天球トノ交線トスレバ, 赤道ト月ノ軌道トノ交點(天球上ニ於ケル)  $R$  ヲ過グル子午線ハ即チ  $PR$  デ,  $PL$  ハ月ノ中心ヲ過ギ,  $PX$  ハ地表ノ與ヘラレタル一點  $X$  ヲ過グル子



午線デアル.  $RL = l$  ハ  $R$  カラ計ツタ月ノ經度,  $BL = \delta$  ハ其赤緯,  $RB = a$  ハ其赤經,  $XB = A$  ハ月ノ時角,  $\gamma = a + A$  ハ  $R$  點ノ時角,  $i$  ヲ赤道ニ對スル月ノ軌道ノ傾斜角トシ, 且ツ

$$(4) \quad \begin{cases} \cos \frac{1}{2} i = p \\ \sin \frac{1}{2} i = q \end{cases}$$

トスレバ, 直角球面三角  $RBL$  カラ

$$(5) \quad \sin \delta = \sin i \sin l = 2pq \sin l$$

$$(6) \quad \cos a \cos \delta = \cos l$$

又三角形  $RLP$  カラ

$$(7) \quad \sin a \cos \delta = \sin l \cos i$$

先ツ第一ニ半日週潮ノ  $\cos^2 \varphi \cos^2 \delta \cos 2A$  ヲ見ルニ,  $A = \gamma - a$  デアルカラ

$$(8) \quad \cos^2 \delta \cos 2A = \cos 2\gamma \cos^2 \delta \cos 2a + \sin 2\gamma \cos^2 \delta \sin 2a$$

然ルニ (6) 及 (7) カラ  $\cos^2 \delta (\cos^2 a - \sin^2 a) = \cos^2 \delta \cos 2a$  デアルカラ

$$(9) \quad \begin{aligned} \cos^2 \delta \cos 2a &= \cos^2 l - \sin^2 l \cos^2 i \\ &= \frac{1}{2} \sin^2 i + \frac{1}{2} (1 + \cos^2 i) \cos 2l \end{aligned}$$

又 (6) ト (7) トヲ節々相乗スレバ

$$(10) \quad \cos^2 \delta \sin 2a = \cos i \sin 2l$$

(9) 及 (10) ヲ (8) = 代用スレバ

$$(11) \quad \begin{aligned} \cos^2 \delta \cos 2A &= \frac{1}{2} \cos 2\chi \left\{ \sin^2 i + (1 + \cos^2 i) \cos 2l \right\} \\ &\quad + \sin 2\chi \cos i \sin 2l \end{aligned}$$

然ルニ (4) カラ

$$(12) \quad \begin{cases} \cos i = p^2 - q^2, & 1 = p^2 + q^2, \\ \sin^2 i = 4p^2 q^2, & (1 + \cos^2 i) = 2(p^4 + q^4) \end{cases}$$

(12) ヲ (11) = 代用スレバ

$$\cos^2 \delta \cos 2A = p^4 \cos 2(\chi - l) + 2p^2 q^2 \cos 2\chi + q^4 \cos 2(\chi + l) \quad [150]$$

同様ニ日週潮ノ項  $\sin 2\varphi \sin 2\delta \cos A$  = 就テモ

$$\begin{aligned} \sin 2\delta \cos A &= -2 \{ p^3 q \sin(\chi - 2l) - pq(p^2 - q^2) \sin \chi \\ &\quad - pq^3 \sin(\chi + 2l) \} \quad [151] \end{aligned}$$

又半月週潮及月週潮ニ就テモ

$$1 - 3 \sin^2 \delta = p^4 - 4p^2 q^2 + q^4 + 6p^2 q^2 \cos 2l \quad [152]$$

斯クノ如ク [149] 式ノ月ノぼてんしやるハ  $\delta$  及  $A$  ナル變數ヲ脱シテ  $p, q, \chi, l$  ヲ以テ表ハサレルコト

トナツタ。尙又  $R$  カラ測ツタ近月點ノ經度ヲ  $\omega_1$ , 月ノ軌道ヲ假ニ橢圓ト考ヘ、其長半徑ヲ  $a$ , 其偏心率ヲ  $e$  トスレバ、 $e = 0,0549$  デアル。今極座標デ表ハシタ月ノ軌道ノ橢圓等式ハ

$$(13) \quad r = \frac{a(1-e^2)}{1+e \cos(l-\omega_1)}$$

デアルカラ、 $e^3$  等高次ノモノヲ除ケバ

$$\frac{1}{r^3} = \frac{\left(1 + \frac{3}{2}e^2\right) + 3e \cos(l-\omega_1) + \frac{3}{2}e^2 \cos 2(l-\omega_1) + \dots}{a^3(1-e^2)^3} \quad [153]$$

故ニ [150], [151], [152] 及 [153] ヲ [149] = 代用シ、兼ネテ  $\cos a \cos \beta$  ヲ  $\frac{1}{2} \{ \cos(a+\beta) + \cos(a-\beta) \}$  ナル和ノ形トスレバ、潮汐ヲ生スル月ノぼてんしやる  $V$  は  $l, \chi$  及  $\omega_1$  = 關シテハ一次ノ引數ヲ有スル圓函數ノ和トシテ表ハサレ得ルノデアル。

然シ圓函數ノ係數ハ一定デハナイ。即チ  $i$  ハ徐々ニ變化シ、其上限ハ赤道ト地球ノ軌道即チ黃道トノ傾斜角  $23^\circ 27' 4''$ ,  $04$  ト月ノ軌道ト黃道トノ傾斜角  $5^\circ 8' 43''$  ノ和  $28^\circ 36'$  デ、其下限ハ是等ノ差  $18^\circ 18'$  ノ間ニ在リ、全年ノ平均ヲ取レバ  $\frac{1}{2}(28^\circ 36' + 18^\circ 18') = 23^\circ 27'$  デアル。故ニ  $p = \cos \frac{1}{2}i = 0,979$ ,  $q = \sin \frac{1}{2}i = 0,203$  從テ  $q^4 = 0,0017$  デ、 $q^4$  ノ項ハ省略スルコトガ出來ル。

又  $e$  ハ時間ニ比例シテ變ジナイノト、月ノ運行ニ

ハ出差及變差ト名クル不等ガアルノミナラズ、實際ニハ月ノ軌道ハ[153]ニ示シタ如ク橢圓デナイ。故ニ是等二ノ月不等ヲ考入ルレバ次ノ補正  $\Delta$  項ヲ[153]ニ附加ヘネバナラス。

$$\Delta = \frac{1}{a^3(1-e^2)^3} \left\{ \frac{45}{8} me \cos(s-2h-\omega) + 3m^2 \cos 2(s-h) \right\} \quad [153']$$

茲ニ  $m$  ハ月及地球ノ平均運動ノ比デ、 $m=0,0748$ ,  $s$  ハ月ノ平均經度、 $\omega$  ハ近月點ノ經度、 $h$  ハ太陽ノ平均經度又ハ平均太陽ノ赤經ヲ表ハシ、凡テ春分點カラ起算シタモノデアアル。故ニ  $s$  及  $h$  ハ時間ニ比例スル變數デアアル。又  $\xi$  ヲ月ノ軌道ト赤道トノ交點  $R$  ノ經度デ春分點カラ起算シタモノトスレバ

$$l = s - \xi + S \quad [154]$$

茲ニ  $S$  ハ  $s$ ,  $\omega$  及  $h$  ニ關シテハ一次ノ引數ヲ有スル圓函數ノ級數カラ成リ、其級數ノ第一項ハ  $e$  ト同程度ノ係數ヲ有シ、第二項ハ  $e$  ノ更ニ高次ナル係數ヲ持ツテ居ル。又

$$\left. \begin{aligned} \omega_1 &= \omega - \xi \\ \chi &= t + h - \nu \end{aligned} \right\} \quad [155]$$

茲ニ  $t$  ハ平均太陽ノ時角デ、即チ平均太陽時ヲ表ハシ、 $\nu$  ハ  $R$  點ノ赤經デアアル。

[154] 及 [155] = 現レタ量  $t$ ,  $h$ ,  $s$  及  $\omega$  ハ時間ニ比例シ、 $\nu$  及  $\xi$  ハ然ラズシテ唯極メテ徐々ニ變ルノミダカラ、一年內デハ其平均ノ値ヲ用フルコトガ出來ル。唯[154]式中ノ  $S$  ハ若シ  $e$  ノ一次及二次式ノミヲ取リ、且ツ其小イ爲ニ

$$(14) \quad \begin{aligned} \cos(l - \omega_1) &= \cos(s - \xi + S - \omega_1) \\ &= \cos(s - \xi - \omega_1) - \sin(s - \xi - \omega_1)S \end{aligned}$$

トスルコトガ出來ル。同様ニ  $l$  ヲ含ンデ居ル外ノ項ニモ同シ代用ヲナスコトガ出來ル。

斯クノ如クシテ潮汐ヲ生ズル月ノぼてんしやるハ圓函數ノ積ノ級數トシテ表ハサレ、更ニ其積ハ之ヲ圓函數ノ和トシテ表ハスコトガ出來ル。

太陽ノぼてんしやるモ全ク同様デアアル。前ノ月ノ軌道ノ偏心率ノ代ニ太陽ノ偏心率ヲ用ヒ、月ノ平均經度及近月點ノ平均經度ノ代ニ太陽ノ平均經度及近日點ノ平均經度ヲ用フレバ宜シイ。又月ノ軌道ノ傾斜角  $i$  ノ代ニ黃道面ノ傾斜角  $23^\circ 27'$  ヲ用ヒ、月ノ  $\nu$  及  $\xi$  ヲ單ニ  $0$  トスレバ可デアアル。斯クシテ得タ式ハ亦半日週潮、一日週潮、半年週潮等ノ凡ベテ必要ナル週期ヲ含ミ、實用ノ目的ニハ充分精密ナルモノデアアルガ、永期ノ振動ヲ含ンデ居ラス。

月並ニ太陽ノ各ぼてんしやるハ多クノ圓函數カ

ラ成立ツテ、之ヲ種類ニ依ツテ群ニ分類スルコトガ出来ル。月ノぼてんしやるハ前ニモ述べタ通り、第一群ハ凡テ12太陰時ノ週期ヲ持ツタ圓函數ヲ含ミ、第二群ハ凡ソ24太陰時ノ週期ヲ持ツタモノデ、第三群ハ凡ソ一週間又ハ一ヶ月以上ノ週期ヲ持ツタ圓函數ヲ含ンデ居ル。

第一群中ニハ最モ肝要ナル太陰半日週潮  $M_2$  ノ項ガアツテ、其引數ハ  $2t+2(h-\nu)-2(s-\xi)$  デアル。今平均太陽時  $t$  ハ一平均太陽日中ニ  $360^\circ$  丈ケ増加スルカラ、一平均太陽時中ニハ  $15^\circ$  丈ケ増加スル勘定デアル。又平均太陽ノ赤經  $h$  ハ一年ニ  $360^\circ$  丈ケ増加スルカラ、一日ニハ  $0^\circ,9856464$ 、一時間ニハ  $0^\circ,0410686$  丈ケ増加スル。從テ  $t+h$  ハ一時間内ニ  $15^\circ,0410686$  丈ケ増加スル。是レ即チ地球公轉ノ角速度  $Q$  デアル。又月ノ平均經度  $s$  ハ月ノ平均動ト呼バレテ居ル速度  $n$  ヲ以テ増加シテ居ル。一時間ノ度數デ言ヘバ  $n=0^\circ,5490165$  デアル。  $\nu$  及  $\xi$  ハ定數ト見做スコトガ出来ルカラ、 $M_2$  潮ノ引數ガ増加スル角速度ハ一平均太陽時ニ對シテ  $2(Q-n)=28^\circ,9841042$  ツ、増加スル譯デアル。是レ即チ  $M_2$  潮ノ週期ハ半太陰日又ハ  $\frac{360}{28,9841}=12,4206$  平均太陽時ナル所以デアル。半日週潮ノ第二項ハ日月合成半日週潮  $K_2$  デ、其引

數ハ  $2t+2(h-\nu)$  デアル。其角速度ハ一平均太陽時ニ  $2Q=30^\circ,0821372$  デ、週期ハ半恒星日即チ 11,9672 平均太陽時ニ等シイ。此外 12,659 時 12,192 時及 12,905 時等ノ週期ヲ持ツタ凡ベテ八個ノ圓函數ハ月ノぼてんしやるノ第一項ヲ爲シテ居ル。

第二群ハ亦八個ノ圓函數ヲ含ミ、其週期ハ皆殆ド一太陰日ニ等シク、其第一項ハ一太陰日ヲ週期トシ、一平均太陽時ニ付キ  $13^\circ,943$  ノ速度ヲ有スル太陰日週潮  $O$  ヲ成リ、第二項ハ一恒星日ヲ週期トシ、 $15^\circ,041$  ヲ速度トスル日月合成日週潮  $K_1$  カラ成立ツテ居ル。

第三群ハ五個ノ永期週潮デ、其中二個ハ殆ド二週間ノ週期ヲ有シ、他ノ二個ハ殆ト一ヶ月、殘ル一個ハ 219,19 時即チ 9日3時11分ノ週期ヲ持ツテ居ル。

太陽ノぼてんしやるモ亦三群ヨリ成リ、第一群中ニハ丁度半太陽日ヲ週期トシ、從テ每時間ノ角速度  $30^\circ,00$  ニ等シキ所ノ太陽半日週潮  $S_2$  及凡ソ半日ニ等シキ週期ヲ有スル他ノ二分潮ガアル。第二群中ニハ二項ヲ有シ、其ニ凡ソ一日ノ週期ヲ持ツテ居ル。其中ノ一ハ即チ 24,07 時ヲ週期トシ、 $14^\circ,959$  ヲ速度トスル太陽日週潮  $P$  デアル。第三群ニハ半年ヲ週期トスル一項ヲ持ツテ居ル。

之ヲ要スルニ潮汐ヲ生スルほとんしやるハ凡ソ  
28個許ヲ含ミ

$$V' = \sum C_n \cos(\beta_n t - u_n) \quad [156]$$

ナル形ヲ有ツテ居ル。茲ニ  $\beta_n = \frac{2\pi}{\tau_n}$ ,  $t$  ハ時間,  $\tau_n$  ハ週  
期デ,  $C_n$  及  $u_n$  ハ定數ヲ表ハス。

165. 潮汐ノ高ヲ表ス公式中ノ諸係數 163 = 述

ベタ如ク, 海面ノ一點  $Q$  = 於ケル水位ハ圓函數  
 $A \cos 2\pi \frac{t}{\tau} + B \sin 2\pi \frac{t}{\tau}$  ナル形ノ有限級數デ表スコトガ  
出來ル。茲ニ  $\tau$  ハ前ニ見出シタ天文上ノ週期, 又ハ  
其  $\frac{1}{2}$ ,  $\frac{1}{3}$ , 又ハ一般ニ  $\frac{1}{n}$  ノ週期或ハ合成シタ週期ヲ  
表ス。故ニ  $Q$  點デ觀測シタ結果カラ係數  $A$  及  $B$  ヲ  
定メナケレバナラス。自記檢潮器ニ依ル潮汐圖又  
ハ潮汐ノ毎時觀測表ハ此目的ニ用フルコトガ出來,  
殊ニ調和分解器ヲ用フレバ潮汐圖カラ係數ヲ見出  
スコトガ出來ル。

今週期ガ  $\tau$  及其分數ヨリ成ルモノトシ, 一群ノ週  
期ハ  $\tau_1, \frac{1}{2}\tau_1, \frac{1}{3}\tau_1, \dots$ , 第二群ハ  $\tau_2, \frac{1}{2}\tau_2, \frac{1}{3}\tau_2, \dots$ , 等トスレ  
バ,  $h_0$  ヲ平均水位トシ, 任意ノ時  $t$  = 於ケル水位  $h$  ハ

$$\left. \begin{aligned} h = h_0 + A_{1,1} \cos 2\pi \frac{t}{\tau_1} + B_{1,1} \sin 2\pi \frac{t}{\tau_1} + \dots \\ + A_{1,2} \cos 4\pi \frac{t}{\tau_1} + B_{1,2} \sin 4\pi \frac{t}{\tau_1} + \dots \\ + A_{2,1} \cos 2\pi \frac{t}{\tau_2} + B_{2,1} \sin 2\pi \frac{t}{\tau_2} + \dots \end{aligned} \right\} \quad [157]$$

$$+ A_{2,2} \cos 4\pi \frac{t}{\tau_2} + B_{2,2} \sin 4\pi \frac{t}{\tau_2} + \dots \Bigg\}$$

平均水位  $h_0$  ヲ見出スニハ, 平均太陰日ノ整數倍ノ  
時間ヲ擇ブヲ便トスル。今平均太陽日及太陽時デ  
365日9時間即チ8769時ハ殆ド精密ニ353太陰日ニ  
等シイカラ, 自記檢潮器ノ潮汐圖カラ, 其零ヨリ上又  
ハ下ニ在ルモノヲ夫々  $h_1, h_2, \dots$  等トシ, 之ニ夫々 + 又  
ハ - ノ負號ヲ附シテ所謂平均ノ値  $h_m$  ヲ見出セバ

$$(1) \quad h_m = \frac{1}{8769} \sum h$$

$h_1, h_2, \dots$  ハ [157] ノ  $t = 1$  時, 2 時乃至 8769 時ヲ代用ス  
レバ得ラル。モノデアルカラ, [157] 及 (1) カラ

$$(2) \quad h_m - h_0 = \frac{1}{8769} \sum \sum \left( A \cos 2\pi \frac{t}{\tau} + B \sin 2\pi \frac{t}{\tau} \right)$$

今凡ベテ 8769 個ノ級數カラ  $\tau = 1$  太陰日ヲ週期トセ  
ル項ヲ取出セバ, 是等諸項ニハ同一ノ係數ヲ持ツテ  
居ルカラ, 其和ハ  $A \sum \cos 2\pi \frac{t}{\tau} + B \sum \sin 2\pi \frac{t}{\tau}$  ナル形デ表ハ  
スコトガ出來ル。茲ニ  $t$  ハ 1, 2, ... 8769 時ヲ表ハス。  
然ルニ  $m, n$  ヲ整數トスレバ一般ニ

$$(3) \quad \left\{ \begin{aligned} \sum_{k=1}^n \cos 2\pi k \frac{m}{n} &= 0 \\ \sum_{k=1}^n \sin 2\pi k \frac{m}{n} &= 0 \end{aligned} \right.$$

ナル關係ガアルカラ, 1 太陰日ヲ週期トセル諸項ノ

和ハ0トナル。此關係ハ太陰半日週潮ニ就テモ同様デアル。

次ニ一太陽日ヲ週期トスルモノ、諸項ノ和ニ就テ見レバ、 $t=1$ 時ノモノト $t=13$ 時ノモノトハ圓函數ノ値ガ相等シクテ唯符號ガ反對デアル。又 $t=2$ 時ノモノト $t=14$ 時ノモノト、或ハ $t=3$ 時ノモノト $t=15$ 時ノモノトハ皆夫々絶體値ガ相等シクテ符號ガ相反シテ居ル。以下之ニ準ジテ唯8769カラ12ノ倍數ヲ減シタ残り9時間ガ餘ル。同様ニ半太陽日ヲ週期トスルモノモ唯最後ノ三時間ニ關スル諸項ヲ殘スノミテ、凡テ其外ノ諸項ノ和ハ消去スル。

最後ニ一恒星日又ハ半恒星日ヲ週期トスル圓函數ニ就テハ365太陽日ハ8760時テ恰モ366恒星時ニ等シイカラ、亦(3)ノ理ニ依リ8760個ノ圓函數ノ和ハ夫々最後ノ九個及三個ヲ餘シテ零ニ等シイ。

故ニ(1)式ノ諸項中同一ノ係數ヲ持ツテ居ルモノノ、和ハ唯少數ノ諸項ヲ殘シテ零トナリ、其殘ツタモノモ一部ハ正デ一部ハ負デ、加フルニ之ヲ8769ト云フ大數ヲ除スルノダカラ(2)式ノ右節ハ非常ニ小ナル値テ、從テ

$$h_0 = h_m \quad [158]$$

是ニ至テ係數A及Bヲ定メナケレバナラス。今

太陰半日週潮ニ就テ、357平均太陰日ノ期間ヲ取レバ殆ド精密ニ369,5平均太陰日ニ等シイ。而シテ潮汐圖ノ横軸上ニ平均太陰時ヲ目盛り、之ニ應ズル縦距ヲ潮汐圖ノ上ニ見出シ、是等ノ縦距カラ12組ノ平均ヲ見出スノデアル。其平均ノ作り方ハ357太陰日ノ中デ第1時及第13時ノ縦距ヲ取リ、凡テ714個ノ縦距ノ平均ヲ取ツテ之ヲ $h_1$ トシ、第2時及第14時ノ凡ベテノ縦距ノ平均ヲ $h_2$ トシ、以下 $h_{12}$ ヲ得ルデアル。斯クノ如ク太陰半日週潮ヲ表ス所ノ圓函數ハ $h_1, h_2, \dots$ 等ノ縦距ヲ表サレテ居ル。然ルニ太陰日週潮ト太陽半日週潮ハ夫々互ニ消去シテ居ル。

蓋シ太陰日週潮ノ第 $m$ 番目ノ太陰時ト第 $m+12$ 番目ノ太陰時ニ應ズル圓函數ハ其値ガ相等シクテ而カモ互ニ正負反對ノ符號ヲ持ツテ居ルカラ、互ニ相消合フ。又太陽半日週潮モ(3)式ヲ應用スルコトガ出來ル。即チ第 $\mu$ 番目ノ太陰時ニ對スル縦距ノ和ハ

$$A \sum_{n=0}^{713} \cos 2\pi(\mu+12n) \frac{q}{\tau_2} + B \sum_{n=0}^{713} \sin 2\pi(\mu+12n) \frac{q}{\tau_2}$$

テ、茲ニ $q$ ハ或ル太陰時、 $\tau_2$ ハ太陽半日週潮ノ週期即チ12太陽時テ、 $\mu$ ハ1,2...12迄ヲ含テ居ル。前ノ級數ノ諸項ニ $\mu$ ハ同一ノ値ヲ有スベキ故、前ノ和ハ

$$C_1 \sum_{n=0}^{713} \cos 24\pi n \frac{q}{\tau_2} + C_2 \sum_{n=0}^{713} \sin 24\pi n \frac{q}{\tau_2}$$

ニ等シイ。茲ニ  $C_1, C_2$  ハ容易ニ計算シ得ル定數デアル。然ルニ前ニモ述べタ通り 357 太陰日ハ 369.5 太陽日ニ等シイカラ、

$$(4) \quad 71714 \times 12q = 739\tau_2$$

又ハ

$$(4') \quad \frac{q}{\tau_2} = \frac{739}{714}$$

故ニ前ノ和ハ次ノ如クナル

$$C_1 \sum_{n=0}^{713} \cos 2\pi n \frac{739}{714} + C_2 \sum_{n=0}^{713} \sin 2\pi n \frac{739}{714}$$

之ヲ(3)式ニ比スルニ又二ノ  $\Sigma$  ハ共ニ夫々自消スルカラ、太陽半日週潮ノ影響モ亦皆無トナル。

自餘ノ小ナル潮波ハ全然消去サル、ト云フコトモナイガ、或ハ正或ハ負トナツテ、而カモ其値ハ極テ小ナルモノデアル。而シテ各個ノ縦距ノ和ニハ太陰半日週潮ノ 714 倍ニ平均水位  $h_0$  ノ 714 倍ヲ加ヘタモノガ殘ルノデアル。故ニ此和ヲ 714 デ除スレバ

$$\left. \begin{aligned} A \cos \frac{2\pi}{12} + B \sin \frac{2\pi}{12} &= h_1 - h_0 \\ A \cos \frac{4\pi}{12} + B \sin \frac{4\pi}{12} &= h_2 - h_0 \\ \dots\dots\dots \\ A \cos 2\pi + B \sin 2\pi &= h_{12} - h_0 \end{aligned} \right\} [159]$$

是等 12 ノ等式カラ最小二乘法ヲ用ヒテ  $A, B$  ニノ係數ヲ定ムルコトガ出來ル。此外ノ分潮ニ對シテハ夫々特殊ノ方法ニ依ツテ其係數ヲ定ムルコトガ出來ルケレドモ、茲ニハ其細目ニ立入ルコトガ出來ス。

最後ニ [157] ニ於テ

$$(5) \quad \begin{cases} \frac{2\pi}{\tau} = \beta \\ A = H \cos \lambda \\ B = H \sin \lambda \end{cases}$$

トスレバ

$$(6) \quad \begin{cases} H = \sqrt{A^2 + B^2} \\ \lambda = \tan^{-1} \frac{B}{A} \end{cases}$$

故ニ [157] ハ

$$h = h_0 + \Sigma H_n \cos(\beta_n t - \lambda_n) \quad [160]$$

ナル形トナル。然ルニ [156] カラ潮汐ヲ生ズル力ノぼてんしやる  $V'$  ハ

$$(7) \quad V' = \Sigma C_n \cos(\beta_n t - u_n)$$

(7)ヲ [160] ニ插入シ、且ツ引數ノ差ヲ  $k_n$  トセバ

$$(8) \quad \beta_n t - u_n - (\beta_n t - \lambda_n) = \lambda_n - u_n = k_n$$

之ヲ [160] ニ代入スレバ

$$h = h_0 + \Sigma H_n \cos(\beta_n t - u_n - k_n) \quad [160']$$

$k_n$  ヲ名ケテ位相ノ遅レ又ハ單ニ遲角ト云ヒ、其零ニ

等シキカ、又ハ正或ハ負ナルカニ從テ、潮波ノ位相ハ潮汐ヲ生ズルカノぼてんしやるノ之ニ呼應スル項ノ位相ニ等シク、又ハ遅クナリ或ハ早クナル。

調和分解ノ法ハ其結果良好デ、潮汐ノ豫報ハ單ニ位相ニ就テノミナラズ其高ニ就テモ之ヲ豫知スルコトガ出來ル。唯強風ノ日ハ障害ヲ見ルヲ常トスル。

166. 我國諸港ニ於ケル潮汐ノ調和分解 1911年平山博士ハだーゐん教授ノ方法ニ依ツテ我國沿岸諸港ノ潮汐ニ就テ調和分解ヲ發表セラレタ。分潮ノ數ハ凡テ28個デ、 $S_1, S_2, S_4, S_6, M_1, M_2, M_3, M_4, M_6, O_1, K_1, K_2, P_1, J_1, Q_1, L_2, N_2, \mu_2, \nu_2, R_2, T_2, MS, 2SM, Mm, Mf, MSf, Sa$  及  $Ssa$ , デアツテ是等各分潮ノ潮程及遲角ガ表示セラレテアル。

167. 潮汐ノ豫知及潮汐表 港灣ニ於テ潮汐ノ干満ヲ豫知スルコトハ極テ必要デ、多クノ港灣デハ必ズ將來ノ毎日高潮低潮ノ時及高サヲ記載シタ潮汐表ヲ作り置クノヲ常トスル。就中印度政府ノ發兌ニ係ル印度洋諸港及北米合衆國政府ノ北米沿岸諸港ノ潮汐表ノ如キハ其最モ廣汎ナルモノ、一二デアアル。

今某港ノ高潮及低潮ノ時及高ヲ豫知スルニハ勿

論其港ノ過去ニ於ケル水位ノ實測ヲ基礎トスルモノデアアル。或ル港ニ於テハ其ノ月潮間隙ガ略ボ一定シテ居ルカラ、數ヶ月間ノ月潮間隙ヲ實測シ其平均カラ平均月潮間隙ヲ見出スコトガ出來ル。故ニ將來ノ或日ノ潮候時ハ其日ニ於テ太陰ガ其地ノ子午線ヲ經過スル時ヲ曆面カラ求メ、之ニ前ノ平均月潮間隙ヲ加フレバ得ラレル筈デアアル。又潮ノ高サハ少クモ一ケ年ノ實測カラ推シテ、知ラントスル日ノ潮汐ノ高サヲ知ルコトガ出來ル。

然ルニ月齡ニ依ツテ高潮及低潮ノ時間ハ異ルノミナラズ其潮程モ亦同一デナイカラ、此月齡トノ關係ハ稍永イ時間ニ涉ツテ月ノ子午線經過ノ真ノ時間ト高潮間隙并ニ低潮間隙トノ關係及月ノ子午線經過ノ真ノ時間ト潮程トノ關係ヲ知リ、之ヲ圖ニ表ストキハ、任意ノ時日ニ於ケル潮時及潮程ヲ知ルコトガ出來ル。但シ實際ノ潮位即チ高低潮ノ真ノ高ヲ見出スニハ平均水位ヲ少クモ一年間ニ涉ツテ知ラナケレバナラス。

日潮不等ノ少イ港灣デハ前ノ方法デ觀測スルトキハ數年ノ後ニ可ナリ正確ナル潮汐ノ豫知ヲ爲スコトガ出來ルケレドモ、其多イ處デハ之ニ對スル更正ヲ加ヘナケレバナラス。蓋シ日潮不等ハ日月ガ



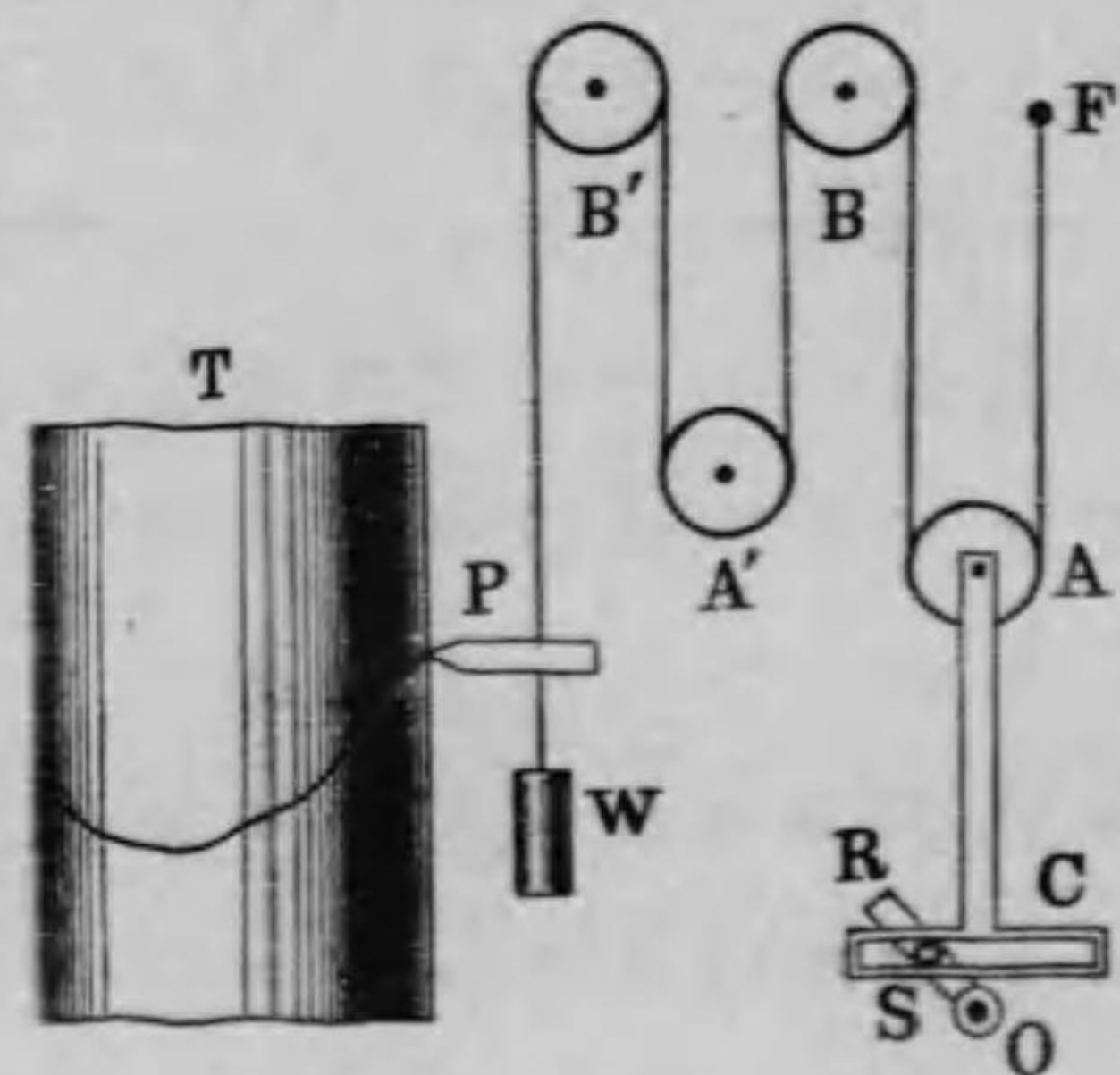
赤道上ニ在ラザル爲ニ生ズルモノデアラカラ、潮時及潮程ガ日月ノ赤緯ニ對シテ如何ニ變化スルカヲ了解レバ宜シイノデアル。是ニハ同一ノ月齡ノ場合ニ於ケル月ノ赤緯ト潮時及潮程ヲ求メテ之ヲ圖ニ表セバ、前ニ得タル月齡及潮時潮程ノ圖ニ照合セテ更正數ヲ見出し得ル道理デアル。太陽ヨリ生ズルモノニ就テモ同様デアル。

又調和分解ノ方法ニ依ツテ調和常數ヲ見出ストキハ將來ニ於ケル潮汐ノ豫知ニ正確ナル値ヲ求ムルコトガ出來ル。而シテ計算ヲ省略セズニ潮時及潮程ヲ求ムレバ正シイ結果ヲ得ルコトガ出來ルケレドモ、實際ニハ計算ガ甚ダ複雑デ手數ヲ要スルコト夥シイ。

調和常數ヲ用ヒ潮汐豫示器ニ依ルトキハ最モ正確ニ最モ迅速ニ潮汐ヲ豫知スルコトカ出來ル。

第百十四圖ハけるぐん式潮汐豫示器ノ原理ヲ示シタモノデアル。A, A'ハ移動シ

第百十四圖



得ル滑車, B, B'ハ固定セル滑車デ、是等ノ滑車ヲ繞ツテ順次ニ絲ヲ懸ケ、其一端ハ F 點ニ固定シ、他端ハ鍾 Wヲ下ゲ、且ツ其上ニべん Pヲ附屬シテ居ル。又 A 滑車ニハ圖ノ如ク地平ノ溝ヲ備ヘタ T 形ノ棒 Cヲ固定シ、Rハ Oヲ中心トシテ廻轉シ得ル直桿デ、其前面ニハ小突起 Sアツテ地平溝ノ中ヲ動キ得ルノデアル。今 Rガ Oノ周圍ニ廻轉スレバ Sモ亦 Oヲ中心トシテ廻轉スルカラ、Cノ溝モ亦上下ニ動キ、滑車 Aモ亦之ニ伴ツテ上下ニ運動スル、然ルニ Cノ地平溝又ハ Aノ上下動ハ OSヲ半振幅トスル餘弦ニ等シイカラ、他端ニ附ケタべんハ其二倍ダケノ上下動ヲスル譯デアル。故ニ Tナル時計仕掛ノ圓筒ニ紙ヲ卷イテ之ヲ回轉セシムレバ Pハ  $2OS$ ニ等シイ振幅ヲ持ツタ餘弦動ヲ紙上ニ描クノデアル。而シテ若シ Rガ二廻轉スル間ニ Tガ一回轉スルモノトセバ圓筒紙上ニハ二回ノ規則正シキ餘弦曲線ヲ得ルノデアル。此場合ニ圓筒ガ一日ニ一回轉スレバ Aハ即チ十二太陽時ヲ週期トスル所ノ  $S_2$ 潮ヲ表ハスコトトナル。又 A'滑車ニモ Aト同一ノ仕掛ニテ唯圓筒ガ一回轉スル間ニ附屬桿ガ  $\frac{24}{12,42} = 1,93227$  即チ 1,93227 廻轉スル様ニスレバ、A'ハ即チ  $M_2$ 潮ヲ表スコトトナル。從テ又 A, A'ガ同時ニ働ケバ  $S_2, M_2$ 兩分潮

ガ合成シタ潮汐曲線ヲ圓筒紙上ニ描ク筈ダ。尙外ニモ若干ノ滑車ガアツテ他ノ分潮ニ應ズル廻轉ノ餘弦動ヲナストキハ、凡テ是等分潮ノ適當ナル組合セニ依ツテ實際ノ潮汐曲線ヲ得ル筈デアアル。

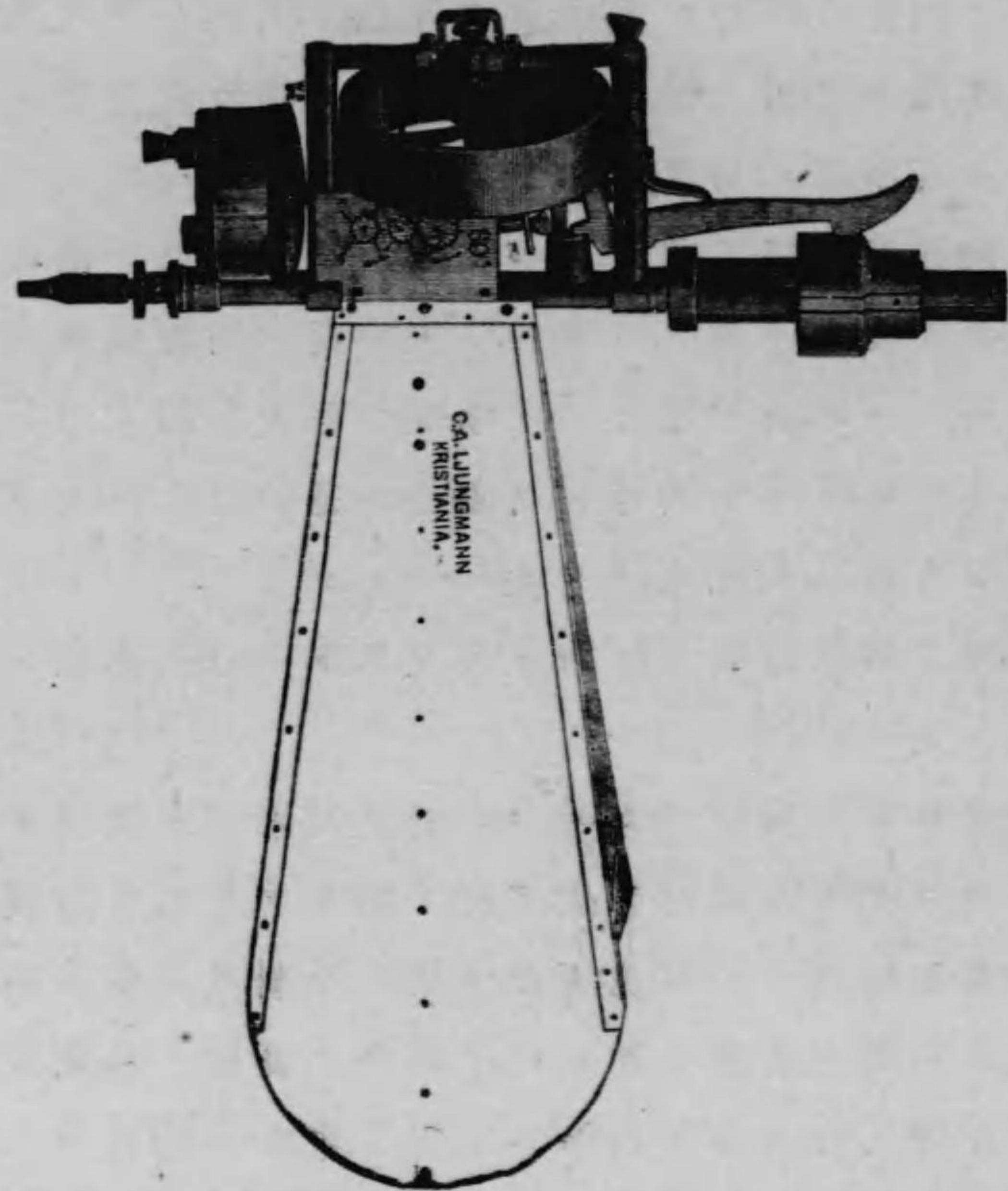
此原理ハけるうん卿ノ工夫ニ成ルモノデ潮汐豫示器ノ構造ハ甚ダ複雑デアアルケレドモ、原理ハ以上述べタ所ニ外ナラス。英國ヤ米國デ使用シテ居ルモノハ頗ル精巧ナルモノデ、我海軍水路部デモ其一臺ヲ持ツテ居ル。

168. 潮流. 潮流トハ潮汐ノ爲ニ海面上ノ二點ノ間ニ高低ヲ生ジ、從テ起ル海水ノ流デアアル。故ニ潮汐ト同ジク普通一日ニ二回其方向ヲ變ズル。海洋中デハ其流速甚小イケレドモ、海岸又ハ海峡ナドデハ往々強烈ナル潮流ヲ見ルコトガアル。而シテ上ケ潮ニ伴フモノヲ漲潮流ト云ヒ、下ケ潮ニ隨テ起ルモノヲ落潮流ト呼デ居ル。又滿潮及干潮ノ間ニ暫時潮流ガ止ムノヲ滯流ト云ヒ、海洋ノ中ニ於テハ平均水位ノ時落差ノナイ爲ニ滯流ヲ生ズル。然シ海岸ニ於テハ潮波ガ進行ヲ阻止セラレ、爲滿潮又ハ干潮ノ時滯流ヲ見、上ケ潮ノ間ハ岸ニ向テ流ル、潮流ヲ生ジ、下ケ潮ノ間ハ之ニ反シテ海ニ向テ流ル、潮流ヲ見ル。

潮波ハ其積疊又ハ干涉ニ依ツテ種々ノ潮程及流速ヲ生ズル。即チ兩方カラ進來ツテ相合シタ場合ニ高潮ト高潮又ハ低潮ト低潮トガ兩々相合スルトキハ其潮程ハ兩者ノ和トナルケレドモ、若シ凡ソ六時間許高潮時ノ差ガアルトキハ高低相補テ潮程ハ兩者ノ差トナルノデアアル。但シ前ノ場合ニハ潮流ハ殆ドナク、後ノ場合ニハ潮流ハ兩者ノ和ニ等シイ速度ヲ有スル。其外ノ高潮時ノ差ノ時ニハ夫々組合セタ潮程ト流速トヲ生ズルノデアアル。若シ二ノ潮波ガ斜ノ方向カラ來テ相交ルトキハ廻轉性ノ潮流ヲ生ズル。

瀬戸トカ海峡トカノ中ニ於テ其兩端ノ水位ガ相異ルトキハ亦潮流ヲ生ズル。而シテ其瀬戸海峡等ガ廣狹屈曲シテ不規則ナルトキハ潮流モ或ハ渦流トナリ、又ハ反流トナルノミナラズ、表流ト潜流トハ其方向及流速等ガ相等シカラズ、非常ニ複雑ナル潮流ヲ生ジ船舶ヲ行ル者ノ虞ヲ爲スコトガ多イ。

潮流ハ浮子、流速計、びと一管等河川ノ流速ヲ測ルト略ボ同様ノ方法ヲ以テ其流速及流向等ヲ測ルコトガ出來ル。瑞典ゆんぐまん (Ljungmann) 社製ノ流速計ハ其製作ガ稍洗鍊ヲ缺クモノガナイデモナイガ、海水ニ對スル金屬ノ電離作用ヲ防ギ、兼ネテ方向



ヲ知ル特殊ノ設備ヲ持ツテ居ル點ヲ以テ知ラレテ居ル(第百十五圖)。

169. 水道又ハ灣内ニ於ケル潮汐 水道又ハ灣内ノ潮汐ハ其水道ノ形及灣形等ニ依ツテ變化シ、潮波ハ寧ロ移動波トナリ、或ハ相積疊シテ振幅ヲ増シ、或ハ相干涉シテ小ナ波トナルノミナラズ、茲ニ所謂

定常波トナツテセーシト同ジ振動ヲナスヲ常トスル。前ニモ述べタ通り我國瀬戸内海デハ西ノ方豊後水道カラ來ル潮波ト東ノ方紀伊水道カラ來ルモノトガ讃岐ノ沖デ相合シテ居リ、此附近ノ潮波ハ最も大ナル振幅ヲ持ツテ居ル。英佛間ノどーばー海峡ノ如キハ亦西ノ方大西洋ヨリ來ル潮波ト東ノ方北海カラ來ルモノトアル、是等兩波ハ英國ノペンざんす(Penzance)ト佛國ノうゑさんと島(Ouessant)ヲ結ンダ直線及へすちんぐす(Hastings)及とればーる(Tréport)ヲ結ンダ直線デ最も大ナル振幅ヲ有シ、其間ノるゝをーす(Lulworth)、かぶらほーぐ(Cap la Hogue)線デ最小振幅ヲ現ハシテ居ル。蓋シ是等ノ諸點ニ於テ振幅ノ小ナル處ハ潮流ガ急デ、之ニ反シテ大振幅ヲ有スル線内デハ潮流ガ殆ト認メラレヌヲ常トスル。即チ前者ハ振動ノ節ニ當リ、後者ハ其腹ニ相當シテ居ル。

漏斗狀ヲナシテ漸次狭クナツテ居ル灣口又ハ河口ナドデハ潮波ノ振幅ガ積疊シテ非常ナル潮程ヲ現スコトガ多イ。例ヘバぶりすとる水道(Bristol Channel)ニ於テ其幅及大潮ノ潮程ハ次ノ如クデア

第五十三表 ぶりすとる水道ノ潮程

地名	距離(軒)	水道幅(軒)	大潮ノ潮程(米)
らんぢー島(Lundy Island)	0,0	68,0	8,2
な、しほいんと(Nashpoint)	78,0	18,5	10,2
かーぢふ(Cardiff)	117,0	14,8	11,4
あほんまうす(Avon mouth)	143,0	7,4	12,2

之ニ反シテ灣口ガ狭クテ内部ニ擴ツテ居ル灣内  
 デハ潮程ガ一般ニ小クナル。例ヘバ和蘭ノづいだ  
 ー灣(Zuider Zee)ノ入口ニ近イはーりんげん(Harlingen)  
 デハ潮程 1,25 米デアアルガ、狭小ナル灣口ヲ入ッテえ  
 んくゐーせん(Enkhuisen)デハ 0,53 米トナリ、更ニ灣ノ  
 南端ニ近キあむすてるだむ(Amsterdam)デハ僅ニ 0,37  
 米ニ過ギナイ。のーるとせー運河ヲ西進シタ北海  
 ノ濱ナルあいむいでん(Ymuiden)ニテハ潮程 1,8 米ニ  
 達シテ居ルガ、あむすてるだむノ潮程ト比較スレバ  
 面白キ對照デアアル。

170. 河口附近ノ潮汐 河口附近ノ海水面ハ上  
 ゲ潮ト共ニ上昇シ、從テ潮波ハ河口カラ漸次上流ニ  
 遡ル。此場合ニ河ノ水面勾配ハ減少シ又其流速モ  
 少クナリ、海水ハ一部河口ニ進入シ、満潮ニ近ク殊ニ  
 朔望高潮ノ時ニハ流向ガ反對ニナツテ河口カラ上  
 流ニ向テ流ル、河モアル。斯クシテ海水ハ河口ニ  
 進入シ、上流カラ流下ル河水モ亦流速ノ減少ト共ニ  
 停滞シテ潮波ノ波動ハ遂ニ潮限ニ達スル。潮限ハ

勿論大潮ト小潮トニ依ツテ河口カラノ距離ヲ異ニ  
 スルガ、一般ニ河口ト潮限迄ノ間ハ即チ其河ノ感潮  
 部デアアル。河口ノ勾配ガ緩デ河幅ノ大ナル河デハ  
 一ノ潮波ガ未ダ潮限ニ達セヌ中ニ後カラ後カラト  
 次々ノ潮波ガ進來ツテ同時ニ數個ノ潮波ガ感潮部  
 内ニ傳播シツ、アルコトガアル。南米ノあまぞん  
 河ノ如キ 1000 軒ノ感潮部ヲ有シテ、7 個乃至 8 個ノ  
 潮波ガ同時ニ其部内ニ移動シツ、アルト云ハレテ  
 居ル。

下ゲ潮トナレバ勾配ガ先ヅ海ニ近イ河口附近カ  
 ラ急ニナツテ漸次上流ニ及シ、流速流量ヲ増スノデ  
 アアル。

河口附近ニ於テ河水ガ下流ニ流ル、時間ハ其逆  
 流スル時間ヨリモ遙ニ大デアアル。蓋シ前者ハ常態  
 トモ云フベク、後者ハ特別ノ場合トモ考ヒ得ルノデ  
 アアル。而シテ成ルベク潮限ヲ上流ニ進メテ河口ニ  
 多クノ潮ヲ吞ムト云フノハ獨リ航路ノ深サヲ維持  
 スル上ニ必要ナル許リデナク、一般ニ河口ニ土砂ノ  
 沈澱堆積スルノヲ防グ上ニ於テ得策デアアル。蓋シ  
 河ノ上流カラ運來ツタ土砂ハ河口ニ來ツテ勾配ノ  
 緩ニシテ流速ノ少イ爲、河水ハ最早遠ク之ヲ運去ル  
 カヲ失ヒ、茲ニ漸次委棄セラレテ所謂砂洲ヲ生ジ、河

口ヲ塞グ結果トナル。殊ニ滿潮干潮ノ前後、波頂又ハ波谷ノ附近デハ河水ガ澄ンデ沈澱ヲ生ズルコトガ多イノヲ常トスル。但シ是ニハ多少ノ除外ガアル。然シテ此沈澱ヲ成ルベク少クスルノハ即チ潮限ヲ遠カラシメテ、波動ノ移動ヲ敏活ナラシムルヨリ外ニ方法ハナイ。是レ實ニ有潮河口改修ノ第一着眼點デアアル。

今一樣ナル断面ト平坦ナル底ヲ持ツタ河ガ海ニ開口シテ居ルモノト假定シ、[160']ニ於テ  $h_0$  ヲ河底カラ測ツタ海ノ平均水位トシ時角ノ起算點ヲ適當ニ變ズルトキハ潮汐ハ簡單ナル正弦曲線トシテ之ヲ表スコトガ出來ル。即チ或時間  $t$  ニ於テ  $h'$  ヲ河底カラ測ツタ水面ノ高サトセバ  $\beta_n = \frac{2\pi}{\tau}$  デアルカラ

$$(1) \quad h' = h_0 + \Sigma H_n \sin \frac{2\pi}{\tau} t$$

河底カラ河ノ平均水位ヲ  $H$ 、平均水位カラ河水面ノ上昇ヲ  $h$  トスレバ  $H+h = h'$  デ、從テ

$$H+h = h_0 + \Sigma H_n \sin \frac{2\pi}{\tau} t \quad [161]$$

ヲ河口ニ於ケル潮汐圖ヲ表スモノト考フルコトガ出來ル。[161]ハ又次ノ如ク表スコトガ出來ル。

$$(2) \quad \frac{h}{H} = \frac{h_0 - H}{H} + \frac{1}{H} \Sigma H_n \sin \frac{2\pi}{\tau} t$$

今先ヅ太陰半日週潮ノミヲ考ヒ、其振幅ヲ  $H_1$  トスレバ

$$(3) \quad \frac{h}{H} = \frac{h_0 - H}{H} + \frac{H_1}{H} \sin \frac{2\pi}{\tau} t$$

$\omega$  ヲ以テ河ノ上流ニ向テ傳播スル潮波ノ速度トスレバ、ふーしねすくニ從ヒ、

$$\omega = \sqrt{gH} \left( 1 + \frac{3}{4} \frac{h}{H} \right) \quad [162]$$

故ニ  $T$  ナル時間内ニ河口ニ進入スル水量ハ

$$(4) \quad \int_0^T \omega h dt = \sqrt{gH^3} \int_0^T \left( \frac{h}{H} + \frac{3}{4} \frac{h^2}{H^2} \right) dt$$

(4)=(3)ヲ代用シ、且ツ  $T = \tau$  トシ、及  $(h_0 - H)^2$  ノ項ヲ省略スレバ

$$(5) \quad \frac{h_0 - H}{H} + \frac{3}{8} \frac{H_1^2}{H^2} = 0$$

或ハ  $H^2$  ノ代ニ  $h_0 H$  ヲ用フレバ、略ボ

$$H - h_0 = \frac{3}{8} \frac{H_1^2}{h_0} \quad [163]$$

是レ即チ海ノ平均水位ハ河ノ平均水位ヨリモ低イコトヲ示シテ居ル。故ニ若干ノ分潮ヲ取レバ其遲角ハ皆夫々相異ルカラ必ズシモ  $H_1^2$  ノ代ニ  $\Sigma H_n^2$  ヲ用フルコトハ出來スケレドモ常ニ  $H - h_0$  ハ正號デアアル。

又太陰半日週潮ノミヲ考ヘタ場合ニ、[161]カラ

$$(6) \quad \frac{2\pi}{\tau} t = \sin^{-1} \frac{H+h-h_0}{H_1}$$

河口カラ上流ニ測ツタ地平距離ヲ  $x$  トスレバ(6)ハ  $x=0$ ニ於ケル  $t$ ヲ  $h$ ノ函数  $f(h)$ トシテ與ヘテ居ルモノデアル。而シテ潮波ガ上流ニ傳播スル關係ハ

$$x = \sqrt{gH} \left(1 + \frac{2}{3} \frac{h}{H}\right) \left(t - \frac{\tau}{2\pi} \sin^{-1} \frac{H+h-h_0}{H_1}\right) \quad [164]$$

若シ河底ノ摩擦ヲ閑却スレバ其傳播速度  $\omega_1$ ハ

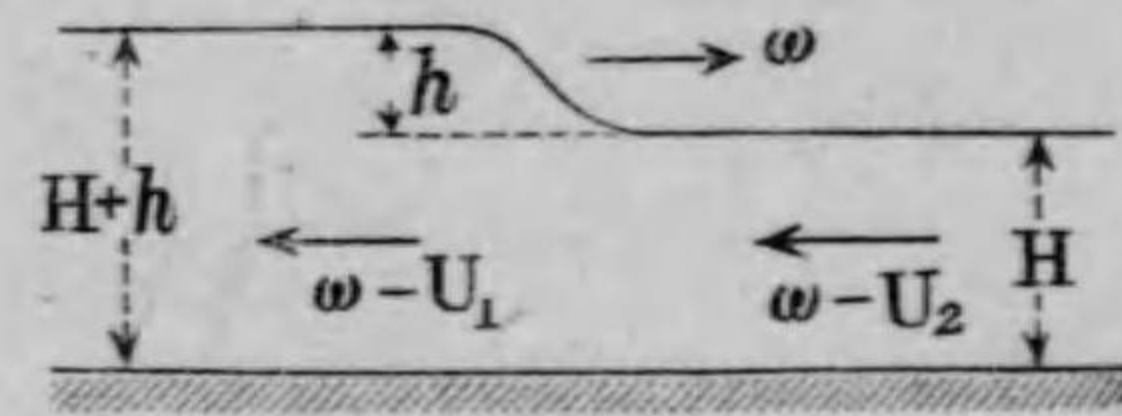
$$\omega_1 = \sqrt{gH} \left(1 - \frac{1}{4} \frac{h}{H+h}\right) \frac{h}{H} \quad [165]$$

デアルガ、今ハ單ニ是等ノ公式ヲ示スニ止メテ置ク。

然ルニ實際ニハ河床ノ摩擦ノ爲ニ傳播速度等ハ變化ヲ受ケル。今第百

第百十六圖

十六圖ニ於テ  $\omega$ ナル速度ヲ以テ上流ニ向テ進行スル波動ガアツテ、河



ノ元ノ深サガ  $H$ 、波ノ高サガ  $h$ デ、從テ波ノ部分ハ  $H+h$ ナル深サヲ有シ、且ツ平均流速ガ波ノ部分ト波ノ來ラザル部分トニ夫々  $U_1$ 、 $U_2$ トスレバ波ニ對スル是等ノ關係流速ハ夫々  $\omega-U_1$ 及  $\omega-U_2$ デアル。故ニ假ニ波ガ固定シタモノト考ヘレバ、 $\omega$ ノ定理カラ

$$(7) \quad (\omega-U_2)^2 - (\omega-U_1)^2 = 2gh$$

デアル。又流量ノ相等シキ點カラ

$$(8) \quad H(\omega-U_2) = (H+h)(\omega-U_1)$$

(8)カラ

$$(9) \quad \begin{cases} \omega-U_2 = \frac{H+h}{H}(\omega-U_1) \\ \omega-U_1 = \frac{H}{H+h}(\omega-U_2) \end{cases}$$

之ヲ(7)式ニ代入スレバ

$$(10) \quad \begin{cases} \frac{(H+h)^2 - H^2}{H^2} (\omega-U_1)^2 = 2gh \\ \frac{(H+h)^2 - H^2}{(H+h)^2} (\omega-U_2)^2 = 2gh \end{cases}$$

若シ  $h$ ガ  $H$ ニ對シテ小ナレバ、其  $h^2$ ヲ省略スルヲ得ベク

$$\left. \begin{aligned} \omega-U_1 &= \sqrt{gH} \\ \omega-U_2 &= \sqrt{g(H+h)} \end{aligned} \right\} \quad [166]$$

是レすこゝとらせる (Scott Russel)ノ公式デアル。

又若シ  $U_2$ ガ小ナルトキハ(7)式カラ、

$$U_1 = \omega - \sqrt{\omega^2 - 2gh} \quad [167]$$

[166]ノ第二式ガ示ス如ク、波ノ無イ部分ノ  $U_2$ ガ一定ナルトキハ、波ノ傳播速度  $\omega$ ハ  $h$ ノ大ナル程大デアル。從テ波頂ノ速度ハ一般ニ波谷ヨリ大デアル。是レ實ニ河ヲ遡ル所ノ潮波ハ多少非對稱ヲナシ、波胸又ハ上流部ニ急テ、波脊又ハ下流部ニ於テ緩ナル

所以デアアル。故ニ又上ケ潮ノ時間ハ短クテ下ケ潮ノ時間ハ永イ結果トナツテ居ル。

各地ノ波頂及波谷ヲ夫々相連スルトキハ潮波ガ昇降スル包絡線ガ得ラレル。而シテ河幅ガ過廣トナリ又ハ過狹トナリ、或ハ迂餘曲折ヲ爲シテ居ルトキハ潮波ハ其進行ヲ阻害セラレテ潮限ガ短クナル。

河床ノ摩擦ガ波速及波形ニ及ス影響ハ之ヲ數學的ニ表スコトガ困難デアアルカラ河川改修ノ後如何ナル潮波ガ河川中ニ表ハル、ヤハ之ヲ豫知スルコトガ困難デアアル。ゑーざー河 (Weser) ノ改修ニ當ツテふらんち、す (L. Franzius) ハすこつとらせるノ

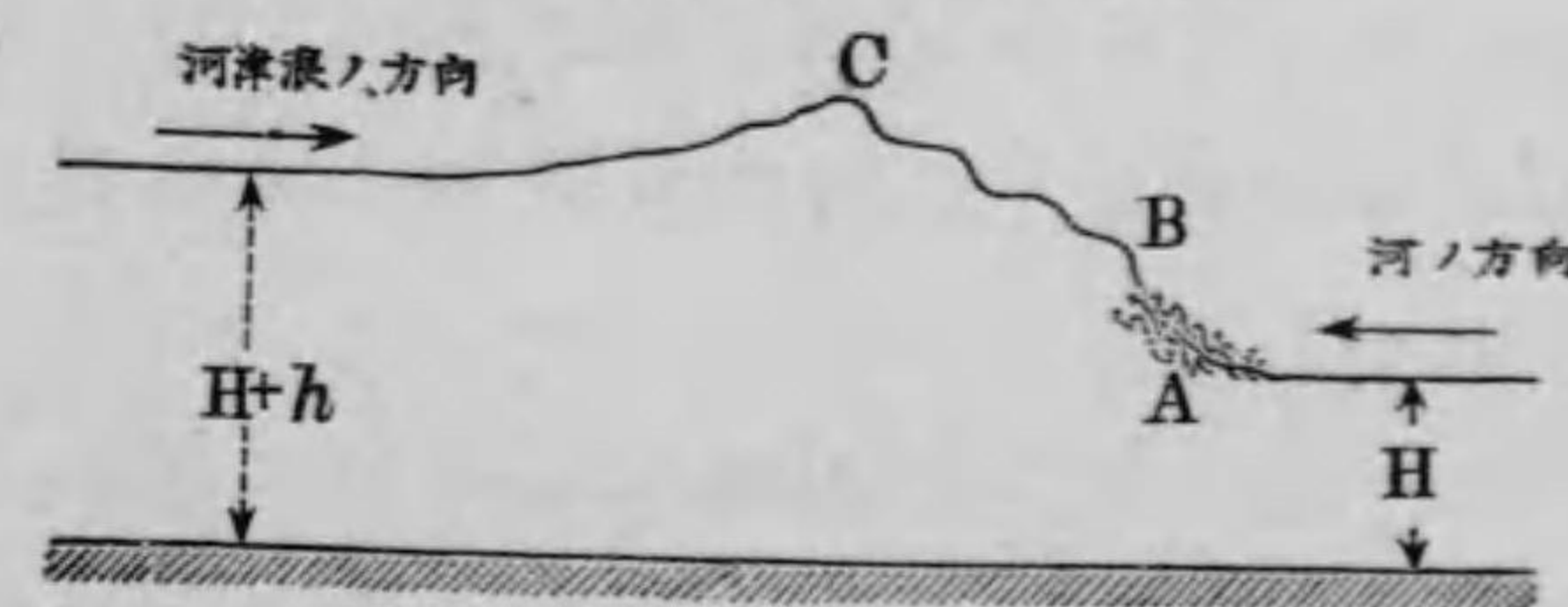
$\omega = \sqrt{g(H+h)}$  ヲ用ヒ、河口ノ外端ニ於ケル潮汐圖カラ漸次波ノ各部ニ對スル波速ヲ見出シ、順次上流ノ各點ニ於ケル上ゲ潮圖ヲ得タ。下ゲ潮ノ方ハ現存セル河ノ古イ潮汐圖カラ類似ニ依ツテ之ヲ見出シタ。

171. 河津浪 河口ガ漏斗狀ヲ爲シテ漸次狭クナリ、且ツ其深サガ小ク低水ノ時砂洲ガ露出スル様ノ處デハ波高ガ漸次高クナル。すこつとらせるノ説ニ從ヘバ、波ノ高サハ殆ト灣幅ノ平方根ニ反比シテ増加スル。斯クノ如ク波高ガ増セバ波頂ト波谷ノ傳播速度ニ遲速ヲ生ズルコト甚シク、遂ニ波頂ハ逆嚮

イテ所謂河津浪ナルモノヲナス。佛蘭西デハ之ヲばる (La Barre) 又ハますかれー (le Mascaret) ト云ヒ、せーぬ河口ハ此河津浪ヲ以テ最モ有名デアアル。又あまぞん河口ノぼろ、か (Pororoca), 支那浙江省錢塘江ノ河口ニ於ケル海嘯等皆是デ、殊ニ大潮ノ時最モ高ク、囂然タル泡聲流音ヲ聞クベク、屢護岸ヲ崩壞シ工作物ヲ粉碎スルコトガアル。

河津浪ノ高サハあまぞん河口ニ於テ5米ニ達シ、錢塘江口デ8乃至10米ノ壁立セル倒潮ヲ見、せーぬ河口デハ3米ノ高サニ達スルコトガアル。其進行速度ハ每秒7乃至8米ニ達スルコトガアツテ、船舶ニモ危害ヲ與ヘルコトガアル。ふらんち一灣ニ開口セルふちーこちあゝく河 (Petitcodiac) デハ、河口カラ24軒ノ上流地點ナルもんくとん (Moncton) ニ於テ河津浪ハ3米ノ高サヲ有シ、其中最下ノ一米許ハ(第百十七圖

第 百 十 七 圖



AヨリB迄壁立シ、自餘ノ2米ハBカラ波頂Cマデ

階段状ヲナシテ居ル。此處ニ於ケル津浪ノ傳播速度ハ每秒3,8米位デアル。ばるちおー (Partiot) ガせーぬ河ノ或ル河津浪ヲ記セル處ニ依レバ高サ2,18米ノ波ガ5,6個相續テ、其波頂ガ中間ノ波谷ヨリ1,5乃至2,0米程高イ。津浪ノ經過シテカラ2,25分許デ水面ハ急ニ1,68米高クナツタ。ばざん (H. Bazin) ハばるちおー及ぼあれー (Poirée) ノ觀測材料ヲ用ヒテ、河津浪ノ速度ヲ  $\omega = \sqrt{g(H+h)} - U$  カラ見出シタ。即チ退潮ノ速度  $U = 0,4$  米/秒、河口ノ舊深  $H = 3,3$  米、波ノ高ヲ  $h = 0,4$  米トスレバ  $\omega = 5,62$  米/秒トナリ、實際ノ速度5,36米/秒ト相距ルコト遠クナイ。而シテ單位時間内ニ流ル、退潮ノ量ハ實ニ  $HU$  デ、同ジク單位時間内ニ河津浪ノ遡ル水量ハ  $h\omega$  デアル。  $h\omega \geq HU$  ニ從テ河津浪ガ起リ又ハ止ム。

上流ニ遡ル程河津浪ハ弱ツテ低クナル。唯あまぞん河ノ如ク數百軒ノ上ニ遡ルノハ稀有ノコトニ屬シ、普通20又ハ30軒位遡ルニ過ギヌ。ぶちーこちあゝく河デハすとーにーくりーく (Stoney Creek) ナル河口カラ13軒ノ處デ河津浪ガ起リ、其上流34軒ノさりすぶりーじょんくしん (Salisbury Junction) ニ終ツテ居ル。而シテ河津浪ハ河床ガ狭クテ淺イ處ニ起ルモノガ多ク、必ズシモ河口トノミハ限ラヌ。

ろーどれーれーハ河津浪ノ起ル前ノ流速ヲ無イモノトシテ、其速度  $\omega$  ヲ次ノ如ク定メタ。

$$\omega = \sqrt{\frac{1}{2} g \frac{(2H+h)(H+h)}{H}} \quad [168]$$

又河津浪ノ後ノ潮流ノ速度  $v$  ハ

$$v = \sqrt{\frac{1}{2} g (2H+h) \frac{(H+h)}{H}} - \sqrt{\frac{1}{2} g (2H+h) \frac{H}{(H+h)}} \quad [169]$$

ぼあんかれーモ亦波頂波谷ノ進速ノ遅速カラ河津浪ヲ論ジテ居ル。

172. 地潮及氣潮 我ガ地球ハ完全ナル剛體デナイ爲ニ、天體ノ起潮力ハ獨リ海水ヲ昇降セシムル許デナク、地殻ハ亦之ニ伴テ變形シ所謂地潮ノ現象ヲ生ズル。然ルニ地球ガ完全ナル剛體ナレバ海水ノ昇降ハ理論ト一致スベク、若シ地殻ガ海水ト同様ニ變形スルモノナラバ海水ハ地殻ト共ニ昇降シテ吾人ハ海水昇降ノコトヲ感ゼザルベキデアルガ、實際ニハ多少地殻ノ變形ヲ生ズルノデ、だーゐんハ永週期潮ノ實測ノ値ト理論ノ値トヲ比較シテ後者ガ前者ノ68%ナルコトヲ知り、地球ヲ全體トシテ鋼ノ剛性ヲ有スルモノナルコトヲ結論シタ。

今地殻ガ外力ノ爲ニ其形狀ヲ變セストキハ、長イ振子ノ下端ハ天體ノ起潮力ノ爲ニ絶エズ週期的ニ



位置ヲ變ジ、垂線又ハ水平面ノ方向ハ亦絶エズ週期的ニ變化スベキ筈ダ、若シ地殻ガ變形スルモノナラバ其週期的變化ノ値ハ理論上ヨリモ小ナルベキデアアル。近來水平振子ニ依ツテ極メテ微弱ナル地殻ノ傾斜ヲ測定シ得ルニ至ツタガ、其結果ニ依レバ實際ノ變化ハ理論上ヨリモ $\frac{1}{4}$ 丈ケ小ダト云フコトダ。但シ此實測ノ週期的變化ノ中ニハ起潮力ノ外ニ潮汐ノ爲ニ生ジタ海水分布ノ變化ニ伴フ地殻ノ傾斜、高潮時及低潮時ニ於ケル海水ノ引力ノ影響等ヲモ含ンテ居ル。ヘッける(O. Hecker)、まいけるそん(S. Mickelson)及志田博士等ノ之ニ關スル研究ガアル。

又潮汐ノ爲ニ海水面ハ昇降シ、海底ニ及ス壓力ハ絶エズ變化スルカラ、地殻モ亦海水面ノ昇降ト共ニ傾斜スル筈ダ。即チ高潮ノ時ハ海岸ノ地殻ハ海ニ向テ傾下シ、低潮ノ時ハ陸ニ向テ傾下スルガ、海岸ヲ距ルコト遠イ程此ノ變化ハ急ニ減少スル。

海上ノ波浪ヤ風壓變化ノ週期ト地殻ノ脈動ノ平均週期ヲ比較シテ大森博士ハ海浪ノ波動ハ直接脈動ヲ生起スル所以ナルヲ結論セラレタ。潮波ノ様ナ週期ノ非常ニ永イモノハ或ハ今日ノ微震計ニテハ充分デナイカモ知レヌガ、尙地殻ガ潮汐ナドノ爲ニ變形スルコトハ此方面カラモ測リ得ル道理デア

ル。

地球ヲ圍メル大氣モ亦起潮力ノ爲ニ全體ノ變形ヲ來シ、從テ地表ニ於ケル氣壓ノ變化ヲ生ズベキ理由デアアル。是レ即チ氣潮デアアル。然シ氣壓ノ變化ハ外ニ種々ノ原因ガアル爲メ、甚ダ複雑デ單ニ氣潮丈ヲ取出スノハ稍困難ナルノミナラズ、其潮程モ亦小ナルモノデアアル。

#### 第五節 海 流

173. 海流ノ流速及大サ 波浪ニ於テハ水分子ガ其靜止ノ状態カラ前後ニ振動シテ行キツ戻リツスルニ反シ、海流ニ於テハ水分子ハ一地點カラ他ノ地點ニ移動シテ遠クニ去ル。

海流ニハ其水温ニ依ツテ暖流及寒流ノ區別ガアル。暖流ノ中デ最モ有名ナルモノハめきしこ灣流及黒潮デアアル。寒流ハ兩極カラ來ル所ノモノヲ含ム。又海流ニハ表面ヲ流ル、表流ト深イ處ヲ流ル、潜流トガアル。

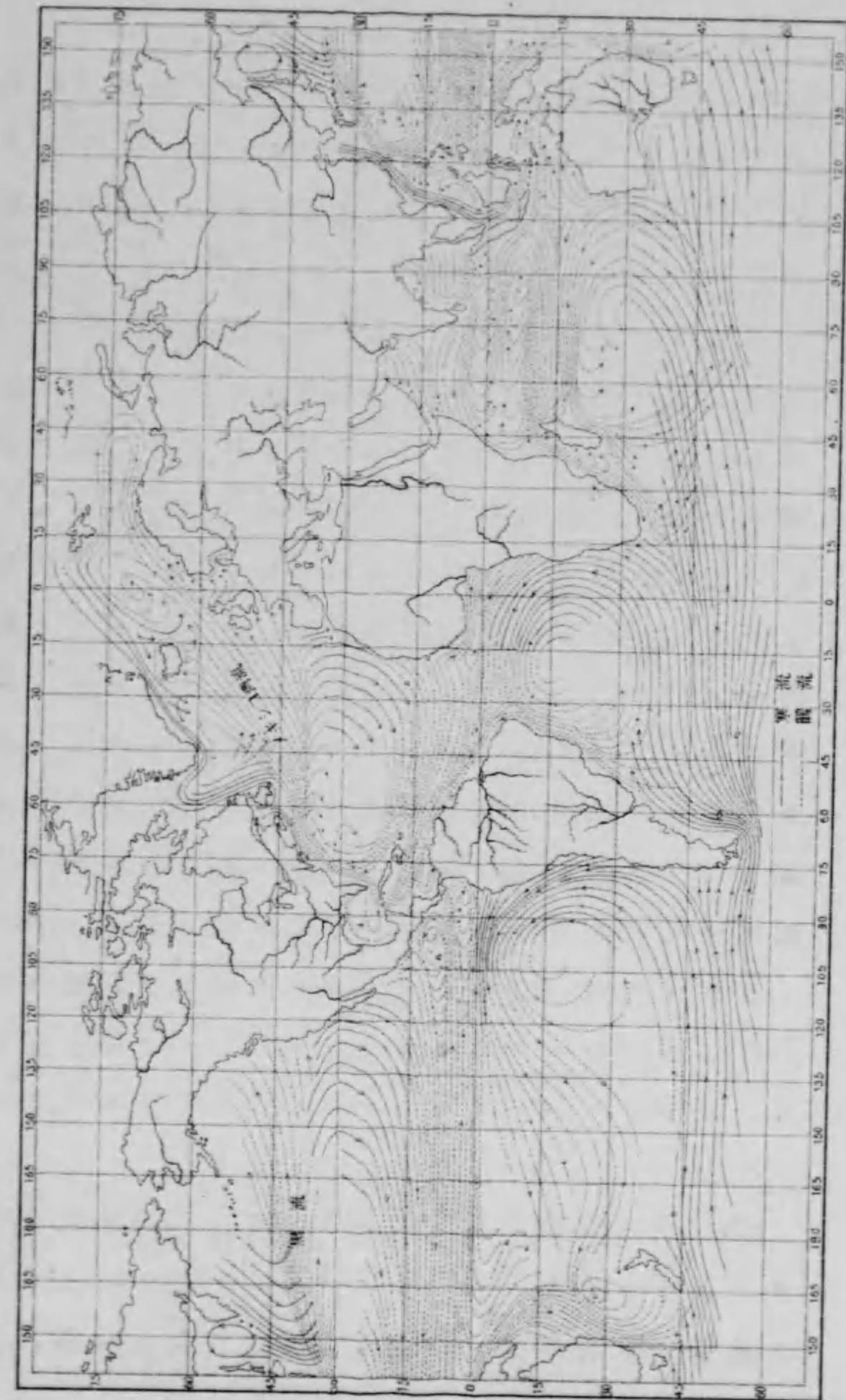
海流ノ流速ハ頗ル少イ。其最大ナルめきしこ灣流又ハふろりだ海流デモ一晝夜120海里(第四章129ニ從ヒ、我地球ノ通極象限ノ長ヲ10002100米トスレバ1海里ハ一般ニ子午線ノ平均一度ノ長ノ六十分一デ1852,24米又ハ端數ヲ切捨テ1852米トスル)又ハ

毎秒 2.57 米ニ過ギナイ。又亞弗利加ノ南部ナルあがらす海流(Agulhas str.)ハ毎時 3.7 海里或ハ毎秒 1.9 米ナルコトヲ知ラレタ。故ニ此等非常ニ大ナル流速ヲ有スル海流デモ風速トハ殆ド比較ニナラス。又どなう河ノぬーん市ニ於ケル高水位流速ハ毎秒 2 米ニ近イカラ、速度ノ大ナル海流ハ稍河ノ流速ニ近イガ、而カモ一般ニ海流ハ其速度ガ甚ダ小デ、之ヲ認識スルコトサヘ困難ナルコトガアル。

海流ノ大サハ甚ダ大デ、其幅ハ數百軒ニ亘リ、其長サハ一海洋カラ他ノ大洋ニ達スルモノガ多イ。然シ海流ノ境界ガ明瞭ナラス爲メ精確ナル寸法ヲ舉ゲルコトハ困難ダ。而シテめきしこ灣流ヲ除キ、海流ノ深サハ甚ダ大ナラズ、表流ハ僅ニ 200 米内外ニ過ギヌコトハ水温ノ測定カラ能ク知ラレテ居ル。第百十八圖ハ世界海流ノ一斑ヲ示シタモノデアル。

海流ノ流速ハ海面ニ大デ、深ヲ増スト共ニ減少スル、但シ最大流速ハ水面ニ在ラズシテ、少シ下ニ在ル。殊ニ海流ノ方向ト反對セル風ガ吹ク時ニ然リトスル。

174. 海水比重ノ差ヨリ起ル海流 一般ニ大洋ノ水ノ比重ノ差ハ極メテ少イガ、是ニハ鹽分ノ差ノ外ニ水温ノ影響モアル。然シ是等カラ起ル比重ノ差



第百十八圖

ノ爲ニ雷ニ水中ノミナラズ、海面ノ表流ヲ生ズル、之ニ加フルニ風ノ爲ニ海流ハ或ハ助長セラル、結果ヲ生ズル。海水上下ノ温度ノ差ノ爲ニ温度せーしヲ生ズルノハ嘗テ述ベタ通デアル。

ペーターソン(O. Peterson)ノ説ニ依レバ、北極地方ノ海デ融雪ノアル處ハ其鹽分ガ14%ニ過ギナイ。而シテ其ノ比重ハ攝氏0°デ、1,01123デアル。然ルニ太西洋ノ鹽分ハ35%デ其ノ密度ハ0°デ1,02813ニ達スル。然シナガラ太西洋ノ水ハ天然ノ高温ノ爲ニ比重ガ少クナルケレドモ、尙北極地方ノ水ヨリモ重ク從テ極地ニ於テ低緯度ノ地ニ向フ寒流ガ表面ヲ流ル、ノヲ見ルコト少クナイ。而シテ此下ヲ流ル、暖流ノ下ニハ再ビ低温ノ水ガ有ル。蓋シ此低温ノ潜流ハ由來表流トシテ存在シタモノガ、氷結ノ爲ニ重ク且ツ鹽分ニ富ンダ結果水中ヲ流ル、ニ至ツタモノデ、低温ノ表流ハ即チ氷雪ノ融解ノ爲メ輕クナツテ表面ニ浮ンダモノデアル。

比重ノ相違ノ爲ニ出來タ海流ハ小ナ海ト大海又ハ大洋ヲ繋イデ居ル所ノ海峡ニ最モ多ク見出サレル。我國ノ津輕海峡、宗谷海峡及臺灣ト支那ノ間ナル臺灣海峡ナドニ見出サレルモノ即チ是デアル。

紅海ハ赤道ノ直下ニ近イ爲ニ一年4米ノ水分ガ

蒸發スルト言ハレテ居ル。從テ其海水ハ鹽分ニ富ミ、此水分ノ缺亡ヲ補充スル爲ニ外ノ海カラ流込マナケレバナラス。然ルニス、運河ハ狭クテ且ツ淺ク、加フルニ運河ノ中部ニハ紅海ヨリモ更ニ鹽分ニ富ンダびつた一湖 (Bitter Lake) ガアル爲、地中海カラ流込ム水量ハ甚少イ。す、す灣ノ北角ニ於ケル海水ハ實ニ42,7%ノ鹽分ヲ含ミ、攝氏17,5ノ溫度デ1,03263ナル密度ヲ有シ、最モ鹽分ノ多イノヲ見テモ之ヲ證スルコトガ出來ル。故ニ紅海ハ印度洋カラ專ラ補充ヲ受ケテ居ル。ばぶえるま、でぶ (Bab-el-Mandeb) ノ海峡ハペリむ島 (Perim Is.) ニ依テ兩分セラレテ居ルガ、東水道ハ狭クテ淺ク、西水道ハ深サ300米ニ達シ、幅12海里ニ及テ居ル。而シテ印度洋カラ紅海ニ向テ流ル、輕イ水ハ表層ニ浮ビ、100米乃至180米ノ下ニハ紅海ノ重イ水ガ反對ニ印度洋ニ向テ流レテ居ル。

ぼすぼらす海峡ハ黒海ト地中海トヲ連テ居ルガ、前者ハ鹽分稀薄デ後者ノ半分ニ過ギナイ。此海峡ノ表流ハ黒海カラ地中海ノ支海まるもら海 (Marmora Sea) ニ向テ流レ、潜流ハ之ト反對ノ方向ヲ以テ流レテ居ル。但シ是等ノ海流ハ時季ニ依ツテ變ジ、どなう河ノ高水ノ際ニハ流勢殊ニ大デアル。まかろふ

(Makarow) ノ測定ニ依レバぼすぼらす海峡ノ中央淺瀬ノ處デ、其深42米ニ過ギナイ。表流ハ每秒1,22米以上ノ流速ヲ以テ流レテ居ルガ深サト共ニ流速ヲ減ジ、20米ノ深サデ流速ハ零トナリ、是以下ハ反對ノ方向ヲ以テ潜流ガ存在シ、始メ流速ハ急ニ増シテ後徐々ニ増加スル。深24米ノ處ニ最大流速ガアツテ每秒0,8米ニ達スル。深40米デ每秒0,4米ノ速度ヲ持ツテ居ル。表流ノ比重ハ攝氏17,5ニ改算シテ10尋即チ18,3米ノ深サマデ殆ド一定シテ凡ソ1,015デアアルガ、10尋乃至14尋ナル表流ト潜流ノ界デハ擴布ノ爲ニ比重ガ増シ、14尋ノ處デ比重方ニ1,027ニ及ンダ。以下海底マデ徐々比重ヲ増シ海底附近デ凡ソ1,031ノ比重ヲ持ツテ居ル。

ちぶらるたる (Gibraltar) ノ海峡ヤ、瑞典丁抹間ノかてがと海峡 (Kattegat) 等ニモ皆各表流ト潜流トガアル。

175. 風ノ爲ニ起ル海流 風ガ海面ヲ掠メテ吹ケバ波ノ外ニ亦海流ヲ生ズル、是レ空氣ト海面トノ摩擦ノ爲ニ水分子ガ風ノ方向ヘ曳摺ラレテ行クカラデアアル。而シテ風ガ陸ニ向テ吹ケバ、海岸ニ於テ跡カラ跡カラト水ハ吹送ラレテ水位ハ高クナリ、時トシテ非常ナル高水位ヲ生ズルコトハ暴風ニ際シテ

灣内又ハ瀬戸ナドニ非常ニ高イ水位ニ達スルコト  
ガアルノニ徴シテ知ラレル。殊ニ強イ風ガ永ク吹  
ク時ヲ最モ然リトスル。斯クノ如ク風ガ陸ニ向テ  
吹ク時海面デハ風ト同方向ノ表流ガ現ハレルガ、水  
中若干ノ深サノ處ニハ之ト反對ノ方向ニ流ル、所  
ノ潜流ガ起ル、之ヲ補流ナド、モ呼ブ。蓋シ補流ハ  
壓力ノ不平均カラ起ルモノデアル。

若シ又風ガ陸カラ海ニ向テ吹ク時ハ水分子ハ海  
ニ向テ吹送ラレ、海岸ノ水位ハ下ガル。而シテ此場  
合ノ補流ハ即チ海カラ陸ニ向フモノデアル。

淺イ海デハ海底ノ摩擦ノ多イノト、流ル、場所ノ  
少イノトデ補流ガ妨ゲラレ、從テ陸ニ向テ風ガ吹ク  
場合ニ淺イ汀デハ著シク平均水位ガ高マルコトガ  
アル。1902年十二月25日26日ノ颶風ハ丁抹ノ海岸  
ヲ吹荒シテかてがと海峡ノ水位ヲ高メ、せーらんど  
島(Seeland)ノ北部海岸ヲ水ニ浸シタ。此海峡中ふれ  
でりくすは一ふえん(Frederikshaven)ニ於テハ水位ノ  
上昇平均水位ノ上1,11米ニ及ビ、あーるす(Aarhus)ニ  
於テ1,21米、こっぺんは一げん(Copenhagen)ニ於テ1,57  
米モ水位ガ高クナツタガ、之ニ反シテ東海ニ面シタ  
海岸ニ於テハ水位ガ著シク降下シタ。こっぺんは一  
げんノ南西30軒ニ在ルくそーげ市(Kjøge)ニテハ水位

ガ3,00米モ下リ、ふるすた一島(Falster)ノ南端ちえつち  
一(Gjedser)ニ於テハ1,50米モ水位ガ降下シタ

貿易風ハ東カラ西ニ向テ吹ク爲ニ回歸線地方デ  
ハ亦海流ハ西流スル。故ニ大陸ノ東部ニ於テハ一  
般ニ暖イ海流ガ岸ニ向テ吹クガ、西岸ニ於テハ冷イ  
補流ガ岸ニ向テ流來ル。

赤道ヲ軸トシテ對稱ヲ爲セル循環表流ガアル。  
北半球ニ於テハ時計ノ針ト同一ノ方向ニ循環シ、南  
半球ニ於テハ之ト反對ノ方向ニ循環スル。是等ハ  
中緯度ノ邊ニ及テ居ルガ、更ニ支流ヲ派シテ高緯度  
ニ達セシメテ居ル。然シ是等ノ支流ハ勿論南北對  
稱ヲ爲シテ居ラス。又太平洋及太西洋デハ可ナリ  
南北釣合ツテ居ルガ、印度洋デハ單ニ南方ノ循環系  
ヲ有スルノミテ、北方ニハ陸地ノ爲ニ海流循環ノ餘  
地ガ無イ。

南北兩循環系ニハ共ニ赤道ニ近ク、東カラ西ニ向  
フ支流ガアル。是レ言フ迄モナク貿易風ノ影響ニ  
依ルモノデアル。而シテ此支流ノ流向ハ殆ド東カ  
ラ西ニ向ツテ居ルガ、貿易風ハ北東カラ西南ニ吹イ  
テ居ル。蓋シ北半球ニ於テハ地球ノ自轉ノ爲ニ凡  
テノ海流ヲ右ニ外レシムル外ニ、比重ノ差ハ海流ヲ  
南北ニ向ハシムル傾向ガアリ、更ニ赤道地方ニ於テ

ハ大雨ガ多ク、從テ蒸發ノ爲ニ鹽分ノ濃度ヲ増シツ、アル回歸線地方ヨリモ表水ノ鹽分ガ少イ爲、是等ノ原因ガ結付テ終ニ東カラ西ニ向ツタ海流ヲ生ジテ居ルモノデアアル。南半球ニ就テモ全ク同理デアアル。

兩極ニ近ク中緯度ニ有ル支流ハ此附近ノ恒風ト殆ド同一方向ヲ有シ、西カラ東ニ向ツテ居ル。南半球ノ中緯度ニ於ケル恒西風ハ殊ニ強ク且ツ定續シテ吹イテ居ル。又北太西洋ノ恒西風モ中緯度ノ地ニ強ク、唯北太平洋ニ於テハ夏期ノ季節風ハ其方向ガ前者ト反對デアアルガ、而カモ一年ノ平均カラ言ヘバ尙西分ノ風ガ多イ。

風ニ依ツテ起ツタ海流ハ表面ニ於テ最大ノ流速ヲ持ツテ居ル。然シ時トシテ海流ト反對ノ方向カラ風ガ吹來ル場合ニハ少クモ表面ノ流速ハ少クナリ、又ハ時トシテ阻止セラレルガ、反ツテ水面以下或深サノ處ニ最大流速ガ表ハレ、是以下ハ漸次復タ流速ガ減少スルコトモアル。めきしこ灣流ハ勿論風ノミニ依ツテ起ツタモノデハナイガ、強大ナル流速ガ稍深イ處ニ在ルハ即チ是ガ爲デアアル。

表面ニ在ツテモ尙海流ノ流速ハ風速ヨリモ遙ニ小デアアル。しあるぢー (Cialdi) ハ是等兩者ノ比ハ其

比重平方根ノ比ニ反比例スルト云ツテ居ル。今海面上ニ於ケル空氣ノ比重ハ蒸溜水ニ比シテ0,001293デ、其平方根ハ0,03596デアアル。而シテもーん (H. Morhn) ハ兩者ノ比ヲ0,0322トシ、忍ーげまん (G. Wegemann) ハ之ヲ0,0466ニ増加シタ。然シ孰レニシテモ是等ノ比ガ何故ニ其比重ノ平方根ニ反比スルガハ未ダ理論的ニ證明セラレテ居ラヌ。

海流ハ其比重ノ差カラ起ルニシテモ、又ハ風ノ爲ニ起ルニシテモ、共ニ地球回轉ノ影響ヲ受ケルガ、而カモ是レ大體ノ方向ニ關スルモノデ、精密ナル數學的ノ理論ヲ示スコトハ困難デアアル。殊ニ局部的ノモノニ至ツテハ種々ナル原因ノモノガ結付テ成ルモノガ多ク、茲ニ其細目ニ入ルコトハ出來ヌ。今ハ特種ノモノ又ハ局部的海流ニ就テ少シク記載スルニ止メ置ク。

176. 沿岸流及漂砂 沿岸流ト稱スルモノハ海岸ニ沿ウテ流ル、一種ノ海流デ、亦風及潮汐等ヲ其主ナル原因トスル。沿岸流ハ海岸ノ淺イ所ヲ流ル、爲メ海底ノ土砂ヲ運搬シ、又ハ河川ガ其上流カラ齎ラシ來ツタ浮游物ヲ荷ヒ去ツテ長汀曲浦ノ或ル處ニ沈澱セシメ、築港ナドノ海中工事ニハ最モ恐ルベキモノデアアル。而シテ沿岸流ノ爲ニ運搬セラル、

土砂ヲ沿岸漂砂ト呼ブ。蓋シ沿岸流ハ猶河水ガ土砂ヲ流去ル如クデアルケレドモ、水制ノ背後又ハ河幅ノ廣イ入江ナドニ至レバ、河水ハ渦卷ヲ生ジテ終ニ流勢ヲ失ヒ、荷來ツタ土砂ヲ沈澱セシムルト同ジク、沿岸流モ亦出入セル海岸デ或ハ渦流ヲ生ジテ沈澱ヲ起シ、或ハ工作物ノ根ヲ洗ツテ深イ窟ミヲ作ルナド、流速ハ一般ニ甚小ナレドモ其絶間ナキ沿岸漂砂ノ爲ニ全然築港ヲ失敗ニ歸セシメタ様ナ例ハ少クナイ。

地中海ノ沿岸流ハちぶらるたるカラ起ツテ海岸ヨリ若干ノ沖ヲ掠メ、其流速毎秒5乃至6浬位デアル。亞弗利加ノ北岸ヲ洗ヒ、ないる河口ノ土砂ヲ運去ツテぼーとさいど (Port Said) ノ防波堤頭附近ニ齧ラシテ居ル。

ばるちっく海 (Baltic Sea) ヤあどりやちっく海 (Adriatic Sea) モ亦皆顯著ナル沿岸流ヲ持ツテ居ル。

我國ノ沿岸ニモ亦至ル所此沿岸流ヲ見ルベク、或ハ河口ノ一方ニ砂濱ヲ延バシ、或ハ港内ニ泥土ヲ送込シテ、絶エズ海中ノ工作物ニ困難ヲ與ヘテ居ル。

177. 潮流 漲潮ト落潮トニ依ツテ夫々漲潮流ト落潮流トヲ生ズルコト前ニ述べタ通デアル。而シテ一般ニ同潮時線ニ直角ナル方向ニ進行シ、一箇所

ニ於テハ潮流ガ時計ノ針ト反對ノ方向ニ廻ル處モアレバ、之ト同方向ニ廻ル處モアル。潮流ハ殊ニ海峡又ハ狭イ瀬戸ナドデ其流速殊ニ大デアル。

## 附 録

### 水力學等式

1. 緒言 流體ハ連續等質ノモノトシ、二ノ相隣レル部分ノ間ノ共通面ニ對シテ斜ノ方向ニ壓力ガ存在シテ平衡ヲ保ツコトノ出來ヌノハ流體ノ性質デアル。即チ流體內デハ至ル所其作用ガ垂直デアツテ、流體ガ一個ノ固體トシテ動ク間ハ切線應力ガ働カヌモノト假定スルノヲ常トスル。

流體ガ外力ニ作用セラレテ生ズル運動ヲ表ス動等式ニハ二種アル。而シテ凡テノ時間ニ於ケル流體內ノ各點ニ就テ其速度、壓力及密度ヲ知ルノガ其第一種デ、各流體分子ノ經歷ヲ定ムルノガ其第二種デアル。此等二種ノ水力學等式ヲ夫々おいらー(Eulerian) 及らぐらんち(Lagrangian)型ト呼ンデ居ルガ、其實雙方トモおいらーガ作ツタモノデアル。

2. おいらーノ等式 三ノ互ニ直角ナル座標軸ヲ取リ、或時間  $t$  ノトキ流體內ノ一點  $x, y, z$  ニ於ケル分速度即チ是等三軸ノ方向ニ分解シタ速度ヲ夫々  $u, v, w$  トスレバ、是等ハ自變數  $x, y, z, t$  ノ函數デ



アル。故ニ或一定ノ $t$ ニ就テハ彼等ハ流體ノ各點ニ於ケル其時間ノ運動ヲ表スベク、又 $x, y, z$ ニ或特別ノ値ヲ與フレバ其點ニ於テ如何ナル經歷ヲナスヤヲ知ルコトヲ得。

今 $u, v, w$ ハ $x, y, z$ ノ有限連続ノ函數ナル許デナク、 $\frac{\partial u}{\partial x}, \frac{\partial v}{\partial x}, \frac{\partial w}{\partial z}$ 等ノ位置ニ對スル微係數モ亦至ル所有限ナルモノト假定スル。是レ即チ所謂連續動ナルモノデ、例ヘバ極近イ二點 $P, P'$ ノ關係速度ハ常ニ無限ニ小ク、從テ $P, P'$ ナル線ハ其大カラ見レバ同一程度ノモノデ、未ダ嘗テ大變化ヲ示サナイ。故ニ又 $P$ 點ヲ圍ンテ居ル小ナ面ハ流體ト共ニ動イテモ亦移動後ノ同點ヲ圍ンデ居ル。

流體內ノ一分子ガ移動スル場合ニ、初メ其分子ガ時間 $t$ ニ一點 $(x, y, z)$ ニ在ツテ、或函數 $F(x, y, z, t)$ ガ成立スルモノトスレバ、 $t + \delta t$ ニハ其分子ノ位置ハ $(x + u\delta t, y + v\delta t, z + w\delta t)$ トナルベク、從テ函數ハ $F(x + u\delta t, y + v\delta t, z + w\delta t, t + \delta t)$ トナリ、之ヲテ一ろあ (Taylor)ノ定理ニ依ツテ展開シ、其高次ノモノヲ省略スレバ

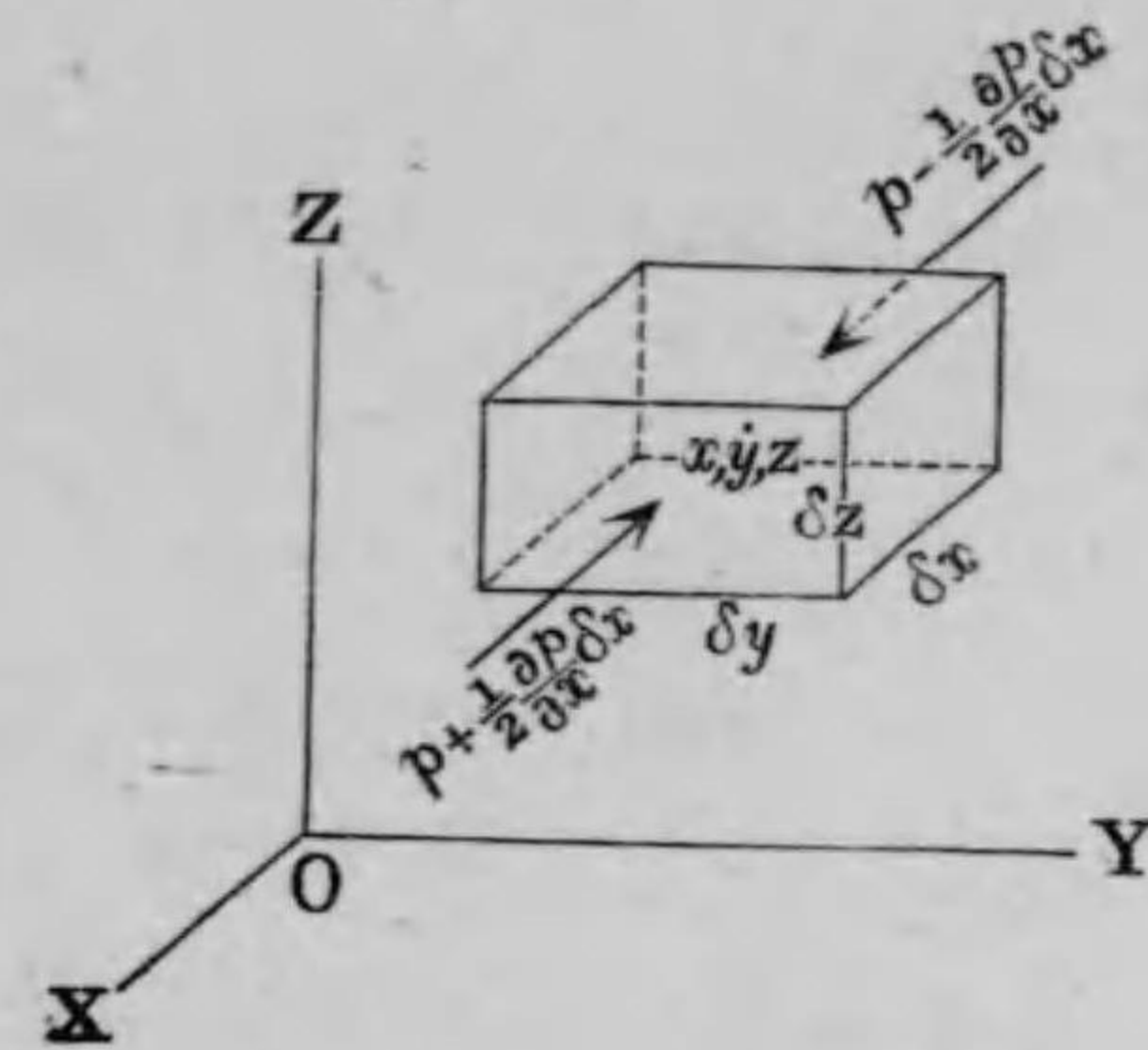
$$(1) \begin{cases} F(x + u\delta t, y + v\delta t, z + w\delta t, t + \delta t) \\ = F(x, y, z, t) + u\delta t \frac{\partial F}{\partial x} + v\delta t \frac{\partial F}{\partial y} + w\delta t \frac{\partial F}{\partial z} + \delta t \frac{\partial F}{\partial t} \end{cases}$$

トナル。或ハ此新函數ヲ $F + \frac{dF}{dt} \delta t$ ヲ以テ表セバ

$$(2) \frac{dF}{dt} = \frac{\partial F}{\partial t} + u \frac{\partial F}{\partial x} + v \frac{\partial F}{\partial y} + w \frac{\partial F}{\partial z}$$

次ニ第一圖ニ示セル如ク、 $t$ ナル時間ニ $(x, y, z)$ ナル點ニ於ケル壓力ヲ $p$ 、密度ヲ $\rho$ 、單位質量ニ働キツ、アル外力ヲ $X, Y, Z$ トシ、且ツ $x, y, z$ ヲ中心トシ、三軸ノ方向ニ測ツタ邊ノ長 $\delta x, \delta y, \delta z$ ナ

第一圖



ル一個ノ極小ナ正六面體ヲ考ヘレバ其全質量ハ $\rho \delta x \delta y \delta z$ デ此小六面體ガ増加シツ、アル働量ヲ $x$ 方向ニ分解シタモノハ即チ $\rho \delta x \delta y \delta z \frac{du}{dt}$ デ、是ハ兼テ又此六面體ニ働イテ居ル力ノ $X$ 方向ニ於ケル分力ニ等シクナケレバナラス。此分力ニハ外力ト壓力トヲ含ンデ居ル。其外力ハ即チ $\rho \delta x \delta y \delta z X$ ニ等シイ。又六面體ノ二ノ $YZ$ 面ノ中基點ニ近イ方ノ面ニ對スル壓力ハ $(p - \frac{1}{2} \frac{dp}{dx} \delta x) \delta y \delta z$ デ、遠イ方ノ $YZ$ 面ニ對スル壓力ハ $(p + \frac{1}{2} \frac{dp}{dx} \delta x) \delta y \delta z$ デアル、從テ其差ハ $-\frac{dp}{dx} \delta x \delta y \delta z$ デ $X$ ノ方向ニ働イテ居ル。但シ他ノ四面ニ働イテ居ル壓力ハ $X$ ノ方向ニ直角デアル。故ニ

$$(3) \quad \rho \delta x \delta y \delta z \frac{du}{dt} = \rho \delta x \delta y \delta z X - \frac{\partial \rho}{\partial x} \delta x \delta y \delta z$$

故=(2)式カラ  $\frac{du}{dt}$  ヲ代用シ、且ツ他ノ  $v, w$  ニ對スルモノヲ作レバ

$$\left. \begin{aligned} \frac{\partial u}{\partial t} + u \frac{\partial u}{\partial x} + v \frac{\partial u}{\partial y} + w \frac{\partial u}{\partial z} &= X - \frac{1}{\rho} \frac{\partial \rho}{\partial x} \\ \frac{\partial v}{\partial t} + u \frac{\partial v}{\partial x} + v \frac{\partial v}{\partial y} + w \frac{\partial v}{\partial z} &= Y - \frac{1}{\rho} \frac{\partial \rho}{\partial y} \\ \frac{\partial w}{\partial t} + u \frac{\partial w}{\partial x} + v \frac{\partial w}{\partial y} + w \frac{\partial w}{\partial z} &= Z - \frac{1}{\rho} \frac{\partial \rho}{\partial z} \end{aligned} \right\} [1]$$

是則求ムル所ノ動等式デ、更ニ  $u, v, w, \rho$  ノ間ノ關係ヲ附加ヘナケレバナラス。

今  $V$  ヲ移動シテ居ル小部分ノ容積トスレバ、質量ノ不變カラ

$$(4) \quad \frac{d}{dt}(\rho V) = 0$$

又ハ

$$(5) \quad \frac{1}{\rho} \frac{d\rho}{dt} + \frac{1}{V} \frac{dV}{dt} = 0$$

今又第二圖ニ示セル如ク、 $t$  ナル時ニ正平行六面體ガ  $\delta x \delta y \delta z$  ナル體積ヲ持チ、其一隅ガ  $P$  點  $(x, y, z) = PL, PM, PN$  ガ三軸ニ平行ナル邊トスル。然ルニ  $t + \delta t$  ナル時ニ此平行六面體ハ一個ノ斜六面體トナル。蓋シ  $P$  ナル分子ニ對シテ  $L$  ナル分子ノ速度ハ

$$\frac{\partial u}{\partial x} \delta x, \quad \frac{\partial v}{\partial x} \delta x, \quad \frac{\partial w}{\partial x} \delta x$$

デ、邊  $PL$  ノ投影ハ  $\delta t$  ノ

$$\text{後夫々} \left(1 + \frac{\partial u}{\partial x} \delta t\right) \delta x,$$

$$\frac{\partial v}{\partial x} \delta t \cdot \delta x, \quad \frac{\partial w}{\partial x} \delta t \cdot \delta x \text{ トナ}$$

ル。故ニ第一次次ヲ

取レバ此邊長ハ

$\left(1 + \frac{\partial u}{\partial x} \delta t\right) \delta x$  トナリ、同様ニ  $PM$  ハ  $\left(1 + \frac{\partial v}{\partial y} \delta t\right) \delta y$  トナリ、 $PN$  ハ  $\left(1 + \frac{\partial w}{\partial z} \delta t\right) \delta z$  トナル。而シテ斜六面體ノ諸角モ直角ト唯極テ僅ニ異ルノミデアルカラ、其體積ハ

$$(6) \quad V + \frac{dV}{dt} \delta t = \left\{ 1 + \left( \frac{\partial u}{\partial x} + \frac{\partial v}{\partial y} + \frac{\partial w}{\partial z} \right) \delta t \right\} \delta x \delta y \delta z$$

又ハ

$$(7) \quad \frac{1}{V} \frac{dV}{dt} = \frac{\partial u}{\partial x} + \frac{\partial v}{\partial y} + \frac{\partial w}{\partial z}$$

故ニ(5)カラ

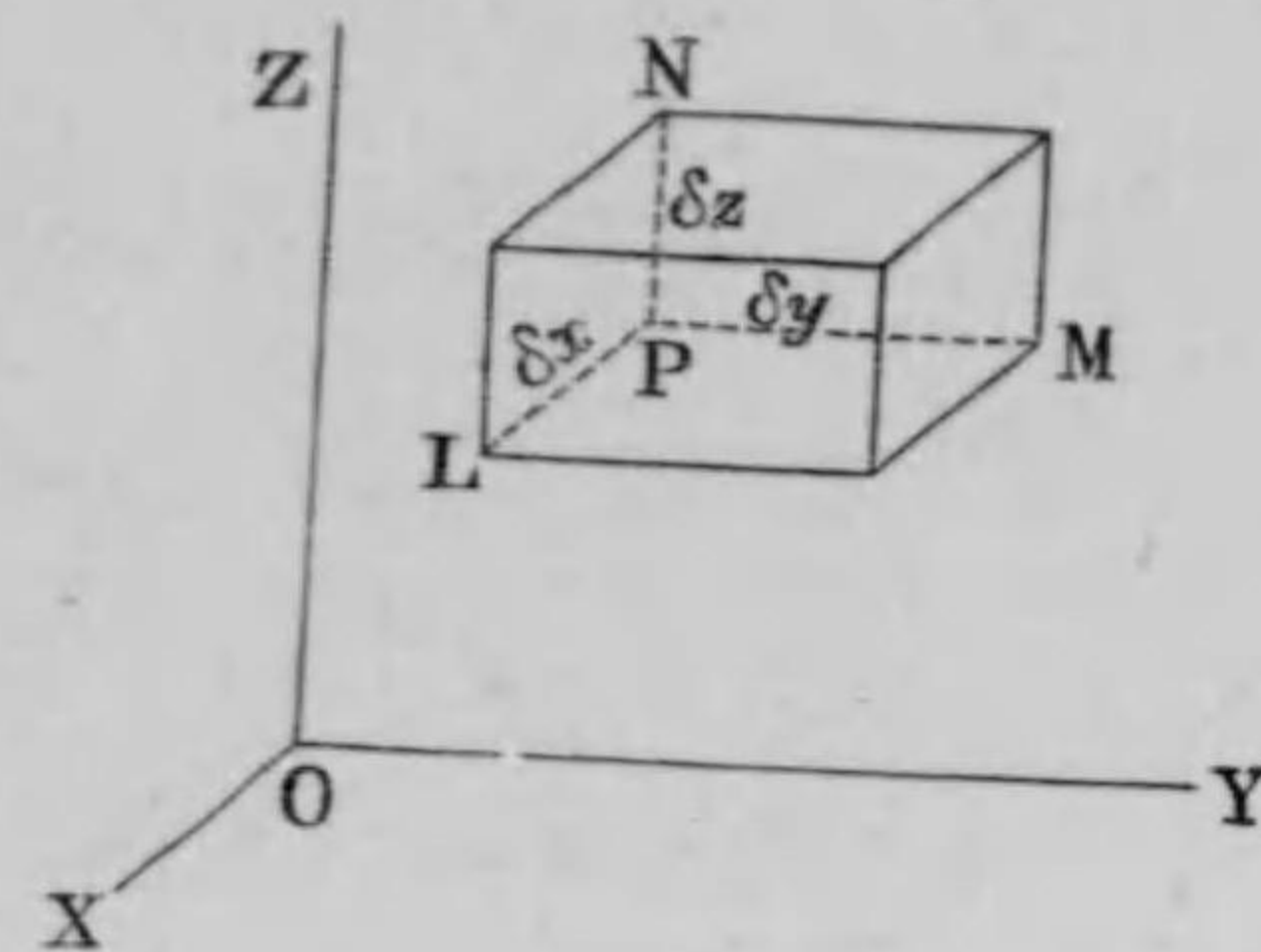
$$\frac{d\rho}{dt} + \rho \left( \frac{\partial u}{\partial x} + \frac{\partial v}{\partial y} + \frac{\partial w}{\partial z} \right) = 0 \quad [2]$$

又ハ(2)カラ

$$\frac{\partial \rho}{\partial t} + u \frac{\partial \rho}{\partial x} + v \frac{\partial \rho}{\partial y} + w \frac{\partial \rho}{\partial z} + \rho \left( \frac{\partial u}{\partial x} + \frac{\partial v}{\partial y} + \frac{\partial w}{\partial z} \right) = 0 \quad [2']$$

是所謂連續等式デアル。  $\frac{\partial u}{\partial x} + \frac{\partial v}{\partial y} + \frac{\partial w}{\partial z}$  ナル量ハ  $x, y, z$  ナル點ニ於ケル容積増加ノ割合ヲ表スモノデ、之ヲ其點ニ於ケル膨脹率ト云フ。

第二圖



今液體即チ壓縮ガ殆ト不可能ナル流體ナラバ[2]  
 = 於テ  $\frac{d\rho}{dt} = 0$  デアルカラ、連續等式ハ更ニ簡單トナ  
 リ、

$$\frac{\partial u}{\partial x} + \frac{\partial v}{\partial y} + \frac{\partial w}{\partial z} = 0 \quad [3]$$

3. らぐらんちノ等式 流體ノ或分子ノ始ノ位  
 置ヲ  $a, b, c$  トシ、時間  $t$  = 於ケル位置ヲ  $x, y, z$  トシ、  
 $x, y, z$  ヲ自變數  $a, b, c, t$  ノ函數ト考へ、從テ  $x, y, z$   
 ヲ自變數ノ項デ表スコトヲ得レバ、流體各分子ノ全  
 經歷ヲ知ルコトガ出來ル。今時間  $t$  = 於テ分子  
 $(a, b, c)$  ノ三座標軸ニ平行ナル分速度ハ夫々  $\frac{\partial x}{\partial t}, \frac{\partial y}{\partial t},$   
 $\frac{\partial z}{\partial t}$  デ、分加速度ハ  $\frac{\partial^2 x}{\partial t^2}, \frac{\partial^2 y}{\partial t^2}, \frac{\partial^2 z}{\partial t^2}$  トスル、又時間  $t$  ノ  
 トキ、此分子ノ附近ニ於ケル壓力ヲ  $p$ 、密度ヲ  $\rho$  トシ、  
 且ツ之ニ働イテ居ル外力ノ分力ハ單位質量ニ付テ  
 $X, Y, Z$  トスルトキハ流體內ガ運動シテ居ル場合ニ  
 $\partial x \partial y \partial z$  ナル容積ノ極微部分ガ時間  $t$  = 於テ、前ニ示  
 シタト同理デ

$$(1) \quad \left\{ \begin{array}{l} \frac{\partial^2 x}{\partial t^2} = X - \frac{1}{\rho} \frac{\partial p}{\partial x}, \\ \frac{\partial^2 y}{\partial t^2} = Y - \frac{1}{\rho} \frac{\partial p}{\partial y}, \\ \frac{\partial^2 z}{\partial t^2} = Z - \frac{1}{\rho} \frac{\partial p}{\partial z} \end{array} \right.$$

(1)式ノ右節ニハ  $x, y, z$  = 關スル微係數ヲ含ンテ

居ルカラ、之ヲ  $a, b, c, t$  ヲ自變數トスルモノニ改メ  
 ナケレバナラス。是ガ爲ニ第一ニ先ツ三式ノ各ニ  
 夫々  $\frac{\partial x}{\partial a}, \frac{\partial y}{\partial a}, \frac{\partial z}{\partial a}$  ヲ乘シテ之ヲ加へ、第二ニ  $\frac{\partial x}{\partial b},$   
 $\frac{\partial y}{\partial b}, \frac{\partial z}{\partial b}$  ヲ乘シテ之ヲ加へ、最後ニ  $\frac{\partial x}{\partial c}, \frac{\partial y}{\partial c}, \frac{\partial z}{\partial c}$  ヲ  
 乘シテ之ヲ加へレバ次ノらぐらんちノ等式ヲ得ラ  
 レル。

$$\left. \begin{array}{l} \left( \frac{\partial^2 x}{\partial t^2} - X \right) \frac{\partial x}{\partial a} + \left( \frac{\partial^2 y}{\partial t^2} - Y \right) \frac{\partial y}{\partial a} + \left( \frac{\partial^2 z}{\partial t^2} - Z \right) \frac{\partial z}{\partial a} + \frac{1}{\rho} \frac{\partial p}{\partial a} = 0 \\ \left( \frac{\partial^2 x}{\partial t^2} - X \right) \frac{\partial x}{\partial b} + \left( \frac{\partial^2 y}{\partial t^2} - Y \right) \frac{\partial y}{\partial b} + \left( \frac{\partial^2 z}{\partial t^2} - Z \right) \frac{\partial z}{\partial b} + \frac{1}{\rho} \frac{\partial p}{\partial b} = 0 \\ \left( \frac{\partial^2 x}{\partial t^2} - X \right) \frac{\partial x}{\partial c} + \left( \frac{\partial^2 y}{\partial t^2} - Y \right) \frac{\partial y}{\partial c} + \left( \frac{\partial^2 z}{\partial t^2} - Z \right) \frac{\partial z}{\partial c} + \frac{1}{\rho} \frac{\partial p}{\partial c} = 0 \end{array} \right\} \dots\dots\dots [4]$$

連續等式ヲ作ル爲ニ、正平行六面體ノ中心ガ  $a, b,$   
 $c$  = 在ツテ其邊長ガ三軸ニ平行ニ  $\partial a, \partial b, \partial c$  デアルト  
 スル。時間  $t$  トナレバ中心ハ  $x, y, z$  トナリ、前ノ六  
 面體ハ斜六面體トナリ、三邊ヲ三軸ニ投影シタモノ  
 ハ夫々

$$\begin{array}{l} \frac{\partial x}{\partial a} \partial a, \quad \frac{\partial y}{\partial a} \partial a, \quad \frac{\partial z}{\partial a} \partial a; \\ \frac{\partial x}{\partial b} \partial b, \quad \frac{\partial y}{\partial b} \partial b, \quad \frac{\partial z}{\partial b} \partial b; \\ \frac{\partial x}{\partial c} \partial c, \quad \frac{\partial y}{\partial c} \partial c, \quad \frac{\partial z}{\partial c} \partial c. \end{array}$$

デ基点ニ最近イ六面體ノ一隅例ヘバ第二圖ノP點ヲ更正基点ト考ヘレバ、此等九ノ量ハ夫々t時間後ニ於ケルL, M及Nノ座標ヲ表シテ居ル。

今空間ノ三點ヲ  $(a', b', c')$ ,  $(a'', b'', c'')$  及  $(a''', b''', c''')$  トシ、是等ヲ結付テ得ル所ノ三角形ノ面積ヲAトシ、YZ, ZX, XYノ三面上ニ於ケルAノ投影ヲ夫々  $A_x, A_y, A_z$  トシ、且ツ  $l, m, n$  ヲ此三角形ヲ含ムノ平面ノ方向餘弦トスレバ勿論

$$(2) \quad \begin{cases} A_x = lA \\ A_y = mA \\ A_z = nA \end{cases}$$

デアル。故ニ基点カラ此三角形ノ平面上ニ引イタ垂線ノ長ヲpトスレバ

$$(3) \quad lx + my + nz = p$$

ハ是等三點ヲ過グル平面ノ等式デアル。

次ニ此三角形ヲ底トシ、基点ヲ以テ頂點トシタ四面體ノ體積ヲVトスレバ

$$(4) \quad 3V = pA = (lx + my + nz)A = xA_x + yA_y + zA_z$$

然ルニ前ノ三點ヲ過グル平面ハ

$$(5) \quad \begin{cases} lx + my + nz = p \\ la' + mb' + nc' = p \\ la'' + mb'' + nc'' = p \\ la''' + mb''' + nc''' = p \end{cases}$$

ナル關係ヲ同時ニ満足サセナケレバナラス。故ニ(5)カラ  $l, m, n$  及  $p$  ヲ消去スレバ

$$(6) \quad \begin{vmatrix} x & y & z & 1 \\ a' & b' & c' & 1 \\ a'' & b'' & c'' & 1 \\ a''' & b''' & c''' & 1 \end{vmatrix} = 0$$

トナル。是レ即チ三點ヲ過グル平面ノ等式デアル。又

$$(7) \quad 2A_x = \begin{vmatrix} b' & c' & 1 \\ b'' & c'' & 1 \\ b''' & c''' & 1 \end{vmatrix}, 2A_y = \begin{vmatrix} c' & a' & 1 \\ c'' & a'' & 1 \\ c''' & a''' & 1 \end{vmatrix}, 2A_z = \begin{vmatrix} a' & b' & 1 \\ a'' & b'' & 1 \\ a''' & b''' & 1 \end{vmatrix}$$

ナル關係ガアルカラ、(6)及(4)カラ

$$(8) \quad 2(A_x x + A_y y + A_z z) = \begin{vmatrix} a' & b' & c' \\ a'' & b'' & c'' \\ a''' & b''' & c''' \end{vmatrix} = 6V$$

デアル。從テ前ノ斜六面體ノ體積ハ夫々三點ノ眞ノ座標ヲ用フレバ

$$(9) \quad \begin{vmatrix} \frac{\partial x}{\partial a} & \frac{\partial y}{\partial a} & \frac{\partial z}{\partial a} \\ \frac{\partial x}{\partial b} & \frac{\partial y}{\partial b} & \frac{\partial z}{\partial b} \\ \frac{\partial x}{\partial c} & \frac{\partial y}{\partial c} & \frac{\partial z}{\partial c} \end{vmatrix} \delta a \delta b \delta c = \frac{\partial(x, y, z)}{\partial(a, b, c)} \delta a \delta b \delta c.$$

トナル。

然ルニ此等兩六面體ノ質量ハ變ラヌカラ、 $\rho_0$ 及 $\rho$   
ヲ夫々前後ノ密度トスレバ

$$\rho \frac{\partial(x,y,z)}{\partial(a,b,c)} = \rho_0 \quad [5]$$

壓縮ノ出來ス流體テハ $\rho = \rho_0$ 、從テ[5]ハ

$$\frac{\partial(x,y,z)}{\partial(a,b,c)} = 1 \quad [5']$$

トナル。

## 附 録

### 河海工學第二編

英和對譯術語

<b>A</b>	
Ageshiwo 上ヶ潮	Flow or flood
Amakage 雨影	Rain shadow
Anshō 暗礁	Shoal
Asshukusei 壓縮性	Compressibility
<b>B</b>	
Bō-fushi 棒浮子	Rod float
Bonchi 盆地	Basin or depression
Bunchō 分潮	Component tide
Bunkai 分解	Decomposition
Bunkwa 分渦	Vortex component
Bunryoku 分力	Component of force
Bunsokudo 分速度	Velocity component
Bunsuikai 分水界	Watershed line
<b>C</b>	
Chichō 地潮	Earth tide or terrestrial tide
Chihyōsui 地表水	Surface water
Chikaku 遲角	Lag
Chikasui 地下水	Ground water
Chikazōnritsu 地下增溫率	Geothermal gradient
Chiri-zahyō 地理座標	Geographical co-ordinates
Chishinkaku 地心角	Geocentric angle
Chōchō 漲潮	Flow or flood
Chōchōryū 漲潮流	Flood current
Chōgen 潮限	Tidal limit
Chōon-riusokukei 聽音流速計	Acoustic current meter
Chōryū 潮流	Tidal current
Chōseki 潮汐	Tide
Chōsekihyō 潮汐表	Tide table
Chōseki yoshiki 潮汐豫示器	Tide-predicting machine or Tide-predictor
Chōsekizu 潮汐圖	Marigram
Chōshō 潮升	Tidal range or amplitude
Chosuichi no shihyō 貯水池ノ指標	Characteristic of reservoir
Chōtei 潮程	Tidal range or amplitude
Chōwa-bunkai 調和分解	Harmonic analysis
Chūrītsusen 中立線	Neutral line
Chūseki 沖積	Alluvium
Chisui 地水	Ground water
<b>D</b>	
Daichōshō 大潮升	Spring rise
Danmen-heikin-riusoku 断面平均流速	Mean profile velocity, mean section velocity or mean velocity
Danseiha 彈性波	Elastic wave
Daritsu 橢率	Ellipticity
Deishōchi 泥沼地	Moorland or moor
Deito 泥土	Silt

Dekiyen 溺堰 Drowned weir  
Denki-riusokukei 電氣流速計 Electric current meter  
Denri-sayō 電離作用 Electrolytic dissociation  
Dōchōjisen 同潮時線 Cotidal line  
Dōonsasen 同溫差線 Thermal isanomatic line  
Dōsha-futanryō 土砂負擔量 Capacity or maximum load  
Dōshinsen 同深線 Isobaths  
Dosū (sui no) 度數(水位ノ) Frequency (of water level)  
Dōsū-kyokusen 度數曲線 Frequency curve

## F

Fuku 腹 Loop  
Fūkwa 風化 Weathering  
Fungan 吩岩 Porphyrite  
Fusen 噴泉 Geyser  
Fusansei 不滲性 Impermeability  
Futeiria 不定流 Unsteady motion  
Futenpa 不轉波 Irrotational wave  
Futsū-chōkōji 普通潮候時 Vulgar establishment  
Fuyuno kōzui 冬ノ洪水 Winter flood  
Fuyūbutsu 浮游物 Suspended matter  
Fuyū-chindenbutsu 浮游沈澱物 Alluvium, debris or sediment

## G

Ganshitsu 岩濕 Hygroscopic water  
Gechō-kangeki 月潮間隙 Lunital interval  
Genbugan 玄武岩 Basalt  
Genbu-yōgan 玄武熔岩 Basalt lava  
Genyō 原搖 Fundamental seiche  
Getsurei 月齡 Age of moon  
Gitenchōkaku 擬天頂角 Apparent zenith distance

Gwansuiryō 含水量 Water-absorbing capacity  
Gyōshūryoku 凝聚力 Cohesion  
Gyakusui 逆水 Back water

## H

Hachō 波長 Wave length  
Haisuikyo 排水渠 Drainage canal  
Hakō 波高 Amplitude of wave  
Hakuha 迫波 Forced wave  
Hankansui 半鹹水 Brackish water  
Hannichishūchō 半日週潮 Semi-diurnal tide  
Hanreigan 稜鏡岩 Gabbro  
Hanritsubōsen 半立拋線 Semi-cubical parabola

Harō 波浪 Waves  
Haryokukei 波力計 Wave dynamometer  
Heikin-chōkōji 平均潮候時 Mean establishment  
Heikin-gechō-kangeki 平均月潮間隙 Mean lunital interval  
Heikin-kyūsoku 平均縱速 Mean vertical velocity  
Heikin-kōbai 平均勻配 Mean slope  
Heikin-kōchō-kangeki 平均高潮間隙 Mean high water interval  
Heikin-kōsui 平均高水位 Mean high water level  
Heikinksui 平均水位 Mean water level  
Heikin-teichō-kangeki 平均低潮間隙 Mean low-water interval  
Heikin-teisui 平均低水位 Mean low water level  
Heikin-tsūkyoku-shōyen 平均通極象限 Mean polar quadrant  
Heisui 平水位 Ordinary water level  
Henka no hōsoku 偏下ノ法則 Law of deviation  
Henri 變流 Varying motion  
Hensa 變差(月ノ) Variation

Hihakugan 飛白岩 Gabbro  
Hikakubō 比較法 Method of Comparison  
Hikishiwo 汐 Ebb  
Hiriuryō 比流量 Specific run-off  
Hōha 放波 Free waves  
Hōkō-yogen 方向餘弦 Direction cosine  
Hōkwai 崩壞 Disintegration  
Honkei 本溪 Principal valley  
Hōrakusen 包絡線 Envelope  
Horinukiido 掘抜井 Artesian well  
Horyū 補流 Compensational current  
Horyūsayō 保留作用(湖水ノ) Retention (of lakes)  
Hōsanchū-deito 放散虫泥土 Radiolarian ooze  
Hyōgako 氷河湖 Glen lake  
Hyōmenchōryoku 表面張力 Surface tension  
Hyōshatai 漂砂堆 Sand bank  
Hyōsui 表水 Surface water  
Hyōha 表波 Surface wave

## I

Idō-shasu 移動砂洲 Wandering sand bank  
Iryoku-kyōsū 引力定數 Attraction constant  
Isō no okure 位相ノ遅レ Lag of phase  
Isō no sa 位相ノ差 Phase difference  
Iwama no mizuumi 岩間ノ湖 Rock basin

## J

Jiki-kenchōki 自記檢潮器 Automatic or self-recording tide-gauge  
Jitsugetsu gōsei hannichi-shūchō 日月合成半日週潮 Luni-solar semi-diurnal tide  
Jitsugetsu gōsei n'ishūchō 日月合

成日週潮 Luni-solar diurnal tide  
Jiyūha 自由波 Free waves  
Jiyū-shindō 自由振動 Free oscillation  
Jyōshōhō 上昇法 method of rises  
Jyūdanmen 縱断面 Longitudinal profile  
Jyūkinsoku 縱均速 Mean vertical velocity  
Jyūryokuha 重力波 Gravitational wave  
Jyūsokusen 縱速線 Vertical velocity curve

## K

Kaia 海窪 Basin or Sea depression  
Kaigō 海濠 Trough, Rift valley, graben  
Kaikō 海溝 Trench  
Kaiseki 海脊 Ridge  
Kaiyō 海洋 Sea and ocean  
Kaki-kōsui 夏期高水位 Summer high water level  
Kakō 河口 River-mouth or river outlet  
Kakōko 火口湖 Crater lake  
Kakufu 擴布 Diffusion  
Kakyō-keisū 河況係數 Coefficient of river regime  
Kanchōbu 感潮部 Tidal compartment  
Kanko 鹹湖 Salt lake  
Kasen no bunpu-mitsudo 河川ノ分布密度 Density of distribution of rivers or river density  
Kasen no hichō 河川ノ比長 Specific development of river  
Kawagishi 河岸 River bank or shore  
Kawatoko 河床 River bed  
Kawa-tsunami 河津浪 Bore  
Keihi 形比 Form ratio  
Keikoku 溪谷 Valley

Keiryū 溪流 Torrent  
 Keiryūdani 溪流谷 Torrential valley  
 Keisō-deito 硅藻泥土 Diatom ooze  
 Keizoku-kyokusen 繼續曲線 Duration curve  
 Kenchōki 檢潮器 Tide gauge  
 Keninryoku 牽引力 Traction or dragging power  
 Kichō 氣潮 Atmospheric tide  
 Kichōryoku 起潮力 Tide-generating force  
 Kijyunmen 基準面 Datum level  
 Kingetsuten 近月點 Perigee or perigium  
 Kinjitsuten 近日點 Perihelium  
 Kinkai-chindenbutsu 近海沈澱物 Hemipelagic deposit  
 Kinshin 均深 Hydraulic mean depth  
 Kintengetsu 近點月 Anomalistic month  
 Kiriwari 切割 Short cut or cut  
 Kōbai 勾配 Relative slope  
 Kōchō-kangeki 高潮間隙 Highwater interval  
 Kōdo 硬度 Hardness  
 Kōdōmen 黃道面 Plane of ecliptic  
 Koha 孤波 Solitary wave  
 Kō-kōchō 高々潮 Higher high-water  
 Kōkō unga 航行運河 Navigation canal  
 Kokusen 谷線 Talweg  
 Komen no yure 湖面ノ搖レ Seiche  
 Kondaku no do 混濁ノ度 Turbidity  
 Kōonsō 恒溫層 Layer of constant temperature  
 Kōō-sui 呼應水位 Corresponding water level  
 Kōsei-chōkōji 更正潮候時 Corrected establishment  
 Koshiwo 小潮 Neap tide  
 Kōsui 硬水 Hard water  
 Kōsui 高水位 High water level  
 Kō-teichō 高低潮 Higher low-water

Kotei no jyōtai (kawa no) 固定ノ狀態(河ノ) Permanent regime (of river)  
 Kōwa 交和 Diffusion  
 Kōzuishō 洪水床 Highwater bed  
 Kūgeki 空隙 Void  
 Kūgekiritu 空隙率 Porosity  
 Kuko 苦湖 Bitter lake  
 Kuro-kakōgan 黑花硬岩 Seynrite  
 Kwangaikyo 灌溉渠 Irrigation canal  
 Kwanjōkenchōki 桿狀檢潮器 Box tide-gauge  
 Kwanyō (kasui no) 涵養(河水ノ) Supply or feed (of water to the river)  
 Kwaidei 灰泥 Marl  
 Kyōgan 響岩 Phonolite  
 Kyokubu-kōbai 局部勾配 Local slope  
 Kyōkoku 峽谷 Cañon or gorge  
 Kyōmei 共鳴 Resonance  
 Kyōseiha 強制波 Forced wave  
 Kyōsei-shindō 強制振動 Forced oscillation  
 Kyūkeichū-deito 球形虫泥土 Globigerina ooze  
 Kyūsui unga 給水運河 Water supply canal

## M

Maikilo rakusa 每軒落差 Kilometric slope  
 Mangan-sui 滿岸水位 Brimful water level  
 Meiansen 明暗線 Hachure  
 Mizumi 湖 Lake  
 Mōkwanha 毛管波 Capillary wave  
 Muhyō-sui 無水水位 Ice-free water level  
 Myakudō 脈動 Pulsation

## N

Nagare 流レ Current

Naichi shosui 內地諸水 Inland water  
 Nansui 軟水 Soft water  
 Natsu no kōzui 夏ノ洪水 Summer flood  
 Nendo 粘土 Clay  
 Nenritsu 粘率 Coefficient of viscosity  
 Netsu no dendōsei 熱ノ傳導性 Conductibility  
 Nensei-keisū 粘性係數 Coefficient of viscosity  
 Nicchō-futō 日潮不等 Diurnal inequality  
 Nō 能 Potential

## O

Ōa kyokusen 凹窪曲線 Depression curve  
 Ōdan-keisū 橫斷係數 Coefficient of cross section  
 Ōshiwo 大潮 Spring tide

## R

Rakuchō 落潮 Ebb  
 Rakuchōryū 落潮流 Ebb current  
 Rakusa 落差 Absolute slope  
 Rekisui 礫錐 Detrital cone  
 Rikuchi 陸地 Land  
 Rippa 立波 Standing wave  
 Riukakō 流下溝 Canal of outflow  
 Riuryōhō 流量法 Method of discharges  
 Riusen 流線 Stream line  
 Riushitsukō 流出高 Height of runoff  
 Riushitsu-kyokusen 流出曲線 Flow-off curve  
 Riushitsuritsu 流出率 Ratio of runoff  
 Riuseku 流速 Velocity  
 Riuyeki 流域 Catchment area or basin

Ryokusu 綠洲 Oasis  
 Ryōsuihyō 量水標 Water gauge  
 Ryūkwān-ū 流函數 Stream function  
 Ryūsui 流水 Flowing water

## S

Sageshiwo 下々沙 Ebb  
 Saiha 碎波 Surf or breaker  
 Saikaryoku 載荷力 Bearing power  
 Saikō-sui 最高水位 Highest high water level  
 Saita-sui 最多水位 The most frequent water level  
 Saitei-sui 最低水位 Lowest low water level  
 Sakubō 朔望 Syzygy  
 Sakubō-kōchōji 朔望高潮時 High-water full & change  
 Saikakusu 三角洲 Delta  
 Santō 滲透 Percolation  
 Santōkei 滲透計 Lysimeter, limsimeter, infiltrationsmeter  
 Santōsei 滲透性 Permeability  
 Sanō teisū 滲透定數 Transmission constant  
 Sashishiwo 潮 Flow  
 Se 瀨 Bank  
 Seikyokusen 正曲線 Normal curve  
 Seirikigakuteki chōsekiron 靜力學的潮汐論 Equilibrium theory of tide  
 Seiryū 齊流 Uniform motion  
 Seisui 靜水 Still water  
 Sekii 赤緯 Declination  
 Sekikei 赤經 Right ascension  
 Sekimizu 堰水 Back water  
 Sekishoku-Shinkai-nendo 赤色深海粘土 Red deep sea clay  
 Sekitome mizumi 堰止湖 Barrier basin  
 Sekkaigansō no chinka 石灰岩層ノ沈下 Limestone sink  
 Senkutsu 洗掘 Erosion

Senkutsudani 洗掘谷 Erosion valley  
 Senpa 遷波 Wave of translation  
 Senshō 淺床 Continental shelf  
 Senshō-chindenbutsu 淺床沈澱物  
 Shelf deposits  
 Sentairyū 潛退流 Undertow  
 Senyen-chindenbutsu 淺淵沈澱物  
 Epilipic deposits  
 Setsu 節 Node  
 Shahanhō 遮版法 Curtain or screen  
 method  
 Shareki 砂礫 Débris or detritus  
 Shareki riuka-keisū 砂礫流下係數  
 Coefficient of flow of detritus  
 Shikei 枝溪 Secondary valley  
 Shinyen-chidenbutsu 深淵沈澱物  
 Abyssal deposits  
 Shinkai-sokuonki 深海測溫器 Deep-  
 sea thermometer  
 Shinpa 進波 Progressive wave  
 Shinshoku 浸蝕 Denudation  
 Shisui 試錐 Boring test  
 Shōchōshō 小潮升 Neap rise  
 Shōshitsukō 消失高 Height of loss  
 Shōtaku 沼澤 Marsh or swamp  
 Shuhahō 首波法 Method of primary  
 wave  
 Shūshūbu 集收部 Receiving basin  
 Shussa 出差(月ノ) Evection  
 Shūsui-kuyeki 集水區域 Catchment  
 area or basin  
 Sō-fushi 双浮子 Twin float  
 Sōkyoku-seigen 雙曲正弦 Hyperbolic  
 sine  
 Sōkyoku-yogen 雙曲餘弦 Hyperbolic  
 cosine  
 Foritsu 粗率 Porosity  
 Sōtō-kōbai 相當勾配 Competent slope  
 Sōtō-riuryō 相當流量 Competent  
 discharge  
 Suichū-fushi 水中浮子 Subsurface  
 float  
 Suidōnai-chōsekiron 水道內潮汐論

Canal theory of tide  
 Suigen 水源 Source  
 Suigenko 水源湖 Source lake  
 Suiheimen 水平面 Level surface  
 Suii 水位 Water level  
 Suiihō 水位法 Method of gauge  
 reading  
 Suii-kyokusen 水位曲線 Hydrograph  
 Suii no jyōshō 水位ノ上昇 Rise of  
 water level  
 Suii no kōka 水位ノ降下 Fall of  
 water level  
 Suijyun kimen 水準基面 Datum  
 level  
 Suimen-fushi 水面浮子 Surface float  
 Suimen-riusoku 水面流速 Surface  
 velocity  
 Suinen 水年 Water year  
 Suiryoku 推力 Thrust  
 Suiryoku-unga 水力運河 Power canal  
 Suisa 推差 Probable error  
 Suishō 水床 Water table  
 Suitei-riusoku 水底流速 Bottom  
 velocity  
 Suna 砂 Sand

## T

Taigankyori 對岸距離 Fetch, reach  
 Taiin-hannichishūchō 太陰半日週潮  
 Semidiurnal lunar tide  
 Taiin-nisshūchō 太陰日週潮 Luni  
 diurnal tide  
 Tairyū 滯流 Slack water  
 Taisui 堆錐 Ejection Cone  
 Taisuisō 帶水層 Water lamina or  
 water carrying layer  
 Taiyō hannichi shūchō 太陰半日週潮  
 Solar semidiurnal tide  
 Tanchōdō 單調動 Simple harmonic  
 motion  
 Tani 谷 Valley  
 Tanigawa 谷川 Torrents

## Y

Tanshindō 單振動 Simple oscillation  
 Tansui 淡水 Sweet water  
 Tate-kōbai 縱勾配 Longitudinal  
 slope  
 Tate no heikinriusoku 縱ノ平均流速  
 Mean vertical velocity  
 Tate no riusoku-kyokusen 縱ノ流速  
 曲線 Vertical velocity curve  
 Teicho-chindenbutsu 汀渚沈澱物  
 Beach deposits  
 Teichō-kangeki 低潮間隙 Low-water  
 interval  
 Teigaichi 堤外地 Foreland  
 Teihenriu 定變流 Steady varying  
 motion  
 Tei-kōchō 低高潮 Lower high-water  
 Teikō-keisū 抵抗係數 Coefficient of  
 resistance  
 Teiriu 定流 Steady or stationary  
 motion  
 Tei-suii 低水位 Lower low-water  
 Tei-teichō 低々潮 Lower low water  
 Tekitei 滴定 Chemical titration \*  
 Tenchō 天頂 Zenith  
 Tenkabutsu 轉下物 Detritus  
 Tenpa 轉波 Rotational wave  
 Tenreki 轉礫 Débris or detritus  
 Tentei 天底 Nadir  
 Tōki-kōsui 冬期高水位 Winter high  
 water level  
 Tōnōmen 等能面 Equipotential  
 surface  
 Tōryō-suii 等量水位 Equivalent  
 water level  
 Tsūjō-suii 通常水位 Ordinary water  
 level  
 Tsuki-no-heikindō 月ノ平均動 Mean  
 motion of moon  
 Tsūkako 通河湖 River lake

## U

Uryōhō 雨量法 Method of rainfall

Yeiki no henkwa 永期ノ變化 Secular  
 variation  
 Yengan-chindenbutsu 沿岸沈澱物  
 Littoral deposits  
 Yengan-hyōsha 沿岸漂砂 Littoral  
 drift  
 Yenganryū 沿岸流 Littoral current  
 Yengetsuten 遠月點 Apogee  
 Yenjitsuten 遠日點 Aphelium  
 Yenso-keisū 鹽素係數 Chlorium  
 coefficient  
 Yenyō-chindenbutsu 遠洋沈澱物  
 Pelagic deposits  
 Yoko-kōbai 橫勾配 Cross slope  
 Yokurin 翼輪 Vane  
 Yokusokuchū-deito 翼足虫泥土  
 Pteropod ooze  
 Yosenami 寄波 Surf or breaker  
 Yūkiteki mizuumi 有機的湖 Organic  
 basin

## Z

Zenjyōshō 全上昇 Absolute rises  
 Zenkinsoku 全均速 Mean profile  
 velocity  
 Zikuha 熟波 Full-grown wave  
 Zikaku 時角 Hour angle  
 Zisuberi 地滑 Landslip  
 Zyunnyō 純搖 Pure seiche





九州帝國大學教授 島君博士 著

島君大測量學

上卷目次第一章 簡易ナル測量：計算ニ用フル諸表...

島君測量學

菊判洋裝 紙數三百七十四頁...

河海工學

第一編 氣象

菊判洋裝 紙數三百餘頁...

九州帝國大學教授

島君博士 著

目次概要 第一章 緒論：氣象及氣象學、地水學、大氣、氣象ノ六要素、水ノ循環...

京都帝國大學教授 工學博士 日比忠彦氏著 (下卷續刊)

# 鐵筋混凝土 其理論及應用

四六倍判洋裝 紙數八百餘頁 正價金七百二十餘圓 郵稅金七拾四錢

目次概要 上卷第一編 緒論：發達の歴史 鐵筋混凝土構造の利害 第二編 材料論：膠着材料 混凝土原料の配合及其産類 混凝土の方法 膠泥混凝土に附する海水の影響 混凝土に對する防水法 膠泥及混凝土の膨脹收縮及其耐火力 混凝土に於ける鐵筋の保護 水結に對する膠泥及混凝土の保護 膠泥の程度 混凝土の強度 鐵及鋼材 第三編 樣式論：床版若くは粗形桁の構造 柱の構造 壁の構造 第四編 桁梁論：普通桁梁及床版 連續桁 第五編 計算論：彎曲を受ける桁の一般假相考 單式矩形桁若くは床版の算法 複式矩形桁若くは床版の算法 單式丁形桁 複式丁形桁 應剪力及粘着力 鐵筋と混凝土との断面の割合に大なる場合に於ける桁若くは床版の算法 桁若くは床版の各樣式に於ける應用算法 撓力度 ● 柱 ● 偏倚荷重を受ける鐵筋混凝土の算法 ● 彎曲を受ける桁の圖式的解法  
中卷 第六編 實驗論：桁梁に關する實驗 ● 柱に關する實驗 ● 基礎論：一般基礎 ● 基礎杭 ● 特殊基礎 ● 第八編 障壁論：障壁 ● 擁壁 ● 第九編 拱及框構造論：總論 ● 拱の理論 ● 框構造論 ● 第十編 建築論：壁 ● 床 ● 柱 ● 階段 ● 屋根 ● 股桁式建築法

東京帝國大學教授 工學博士 柴田畦作氏著

# 工業力學

四六倍判洋裝 紙數三百六十餘頁 正價金三百餘圓 郵稅金拾八錢

目次 第一編 緒論：度量術及時ノ單位・力・豫備數學・面力・速度及加速度 第二編 力學ノ原理：(1)ノ動ノ三則・働及勢・力學ノ基礎原理 第三編 彈體靜力學：物體ノ強弱・抗張材及短柱・單桁・連桁・かすりあひのノノ定理解・長柱・難論・應用強度論 第四編 粉體靜力學：摩察力・粉體ノ壓力及抵抗力 第五編 液體靜力學 第六編 液體動力學：定流ニ關スルベシテ完全ニ伸縮ナキ物體ノ靜力學 第八編 構造物靜力學：平面結構石壘・擁壁

熊本高等工業學校教授 工學士 小三浦 茂 橋氏 工學士 遠藤 金市氏 工學士 松木 岩太郎氏 工學士 德弘 春美氏 共著

# 土木工學

菊判洋裝 紙數千八百四十餘頁 正價金四百八拾圓 郵稅金拾八錢

上卷目次 豫備數學 第一編 解析幾何學大意：點・直線・座標軸の變換・圓・圓錐曲線 第二編 微積分學大意：微分學・積分學 第一編 靜力學 第一章 力 第二章 平面形之中心 第三章 力之合成 第四章 力之分解 第五章 力之平衡 第六章 力之作用 第七章 力之作用 第八章 力之作用 第九章 力之作用 第十章 力之作用 第十一章 力之作用 第十二章 力之作用 第十三章 力之作用 第十四章 力之作用 第十五章 力之作用 第十六章 力之作用 第十七章 力之作用 第十八章 力之作用 第十九章 力之作用 第二十章 力之作用 第二十一章 力之作用 第二十二章 力之作用 第二十三章 力之作用 第二十四章 力之作用 第二十五章 力之作用 第二十六章 力之作用 第二十七章 力之作用 第二十八章 力之作用 第二十九章 力之作用 第三十章 力之作用 第三十一章 力之作用 第三十二章 力之作用 第三十三章 力之作用 第三十四章 力之作用 第三十五章 力之作用 第三十六章 力之作用 第三十七章 力之作用 第三十八章 力之作用 第三十九章 力之作用 第四十章 力之作用 第四十一章 力之作用 第四十二章 力之作用 第四十三章 力之作用 第四十四章 力之作用 第四十五章 力之作用 第四十六章 力之作用 第四十七章 力之作用 第四十八章 力之作用 第四十九章 力之作用 第五十章 力之作用 第五十一章 力之作用 第五十二章 力之作用 第五十三章 力之作用 第五十四章 力之作用 第五十五章 力之作用 第五十六章 力之作用 第五十七章 力之作用 第五十八章 力之作用 第五十九章 力之作用 第六十章 力之作用 第六十一章 力之作用 第六十二章 力之作用 第六十三章 力之作用 第六十四章 力之作用 第六十五章 力之作用 第六十六章 力之作用 第六十七章 力之作用 第六十八章 力之作用 第六十九章 力之作用 第七十章 力之作用 第七十一章 力之作用 第七十二章 力之作用 第七十三章 力之作用 第七十四章 力之作用 第七十五章 力之作用 第七十六章 力之作用 第七十七章 力之作用 第七十八章 力之作用 第七十九章 力之作用 第八十章 力之作用 第八十一章 力之作用 第八十二章 力之作用 第八十三章 力之作用 第八十四章 力之作用 第八十五章 力之作用 第八十六章 力之作用 第八十七章 力之作用 第八十八章 力之作用 第八十九章 力之作用 第九十章 力之作用 第九十一章 力之作用 第九十二章 力之作用 第九十三章 力之作用 第九十四章 力之作用 第九十五章 力之作用 第九十六章 力之作用 第九十七章 力之作用 第九十八章 力之作用 第九十九章 力之作用 第一百章 力之作用 第一百零一章 力之作用 第一百零二章 力之作用 第一百零三章 力之作用 第一百零四章 力之作用 第一百零五章 力之作用 第一百零六章 力之作用 第一百零七章 力之作用 第一百零八章 力之作用 第一百零九章 力之作用 第一百一十章 力之作用 第一百一十一章 力之作用 第一百一十二章 力之作用 第一百一十三章 力之作用 第一百一十四章 力之作用 第一百一十五章 力之作用 第一百一十六章 力之作用 第一百一十七章 力之作用 第一百一十八章 力之作用 第一百一十九章 力之作用 第一百二十章 力之作用 第一百二十一章 力之作用 第一百二十二章 力之作用 第一百二十三章 力之作用 第一百二十四章 力之作用 第一百二十五章 力之作用 第一百二十六章 力之作用 第一百二十七章 力之作用 第一百二十八章 力之作用 第一百二十九章 力之作用 第一百三十章 力之作用 第一百三十一 力之作用 第一百三十二 力之作用 第一百三十三 力之作用 第一百三十四 力之作用 第一百三十五 力之作用 第一百三十六 力之作用 第一百三十七 力之作用 第一百三十八 力之作用 第一百三十九 力之作用 第一百四十 力之作用 第一百四十一 力之作用 第一百四十二 力之作用 第一百四十三 力之作用 第一百四十四 力之作用 第一百四十五 力之作用 第一百四十六 力之作用 第一百四十七 力之作用 第一百四十八 力之作用 第一百四十九 力之作用 第一百五十 力之作用 第一百五十一 力之作用 第一百五十二 力之作用 第一百五十三 力之作用 第一百五十四 力之作用 第一百五十五 力之作用 第一百五十六 力之作用 第一百五十七 力之作用 第一百五十八 力之作用 第一百五十九 力之作用 第一百六十 力之作用 第一百六十一 力之作用 第一百六十二 力之作用 第一百六十三 力之作用 第一百六十四 力之作用 第一百六十五 力之作用 第一百六十六 力之作用 第一百六十七 力之作用 第一百六十八 力之作用 第一百六十九 力之作用 第一百七十 力之作用 第一百七十一 力之作用 第一百七十二 力之作用 第一百七十三 力之作用 第一百七十四 力之作用 第一百七十五 力之作用 第一百七十六 力之作用 第一百七十七 力之作用 第一百七十八 力之作用 第一百七十九 力之作用 第一百八十 力之作用 第一百八十一 力之作用 第一百八十二 力之作用 第一百八十三 力之作用 第一百八十四 力之作用 第一百八十五 力之作用 第一百八十六 力之作用 第一百八十七 力之作用 第一百八十八 力之作用 第一百八十九 力之作用 第一百九十 力之作用 第一百九十一 力之作用 第一百九十二 力之作用 第一百九十三 力之作用 第一百九十四 力之作用 第一百九十五 力之作用 第一百九十六 力之作用 第一百九十七 力之作用 第一百九十八 力之作用 第一百九十九 力之作用 第二百 力之作用

# 土壓及擁壁設計法

菊判洋裝 紙數三百六十餘頁 正價金百五十餘圓 郵稅金拾八錢

九州帝國大學助教授 工學士 吉田德次郎氏著

商船學校 理學士 佐野榮治氏著

# 實用力學

目次 前編 緒論 第一章 物質ノ力及重サ 第二章 力ノ合成及分解 第三章 力ノ能率 第四章 實用上ノ應用 第五章 重心  
第六章 材料強弱論 第七章 速度ノ法則 第八章 運動ノ法則 第九章 摩擦抵抗 第十章 機械ノ效率 第十一章 斜面及螺旋 第十二章 各種ノ機械 第十三章 動力ノ傳達  
第十四章 流體力學 第十五章 往復運動 第十六章 水壓機械 第十七章 運動スル水 第十八章 機械製作及建築材料

# 英和建築語彙

建築學會編纂  
建築語區々不定の爲に我國建築界の不便不利を感ずるや久し、之に對して建築語彙を編纂するの必要は我建築家有志の夙に唱道する所たり、今や建築界の歳を逐ふて發達するに從ひ此必要愈々痛切なるものあり、これ我建築學會の蓄起を促し此難事を完成せしめんとせる所以也、本學會の編纂に參與せる五博士は、何れも建築會の權威に拾はれたる四年五月の精苦を捧げ外國の建築術語及熟語の和譯を一定せんと先づ英和對譯より初め漸次獨佛に達し、現代人と著はされたる本書を包摂するに五千人更に重出する復語を合算すれば七千七百有餘、挿圖全數四百三十有餘種也、實地に用ひられし月書の精苦を捧出るものは盡く撰取の上最善と認めべき譯語を採用し、尙新たに創りたる譯語は從來の建築術語及術語を一定するの也、不精確なるものならず更により緊要の譯語を全然除棄し、最新の知識を加ふ、要するに本書は從來の建築術語及術語を一定するの也、不精確なる家及美術は勿論建築に關する一般研究者を裨益するの治大なる特種字典として蓋し空前ならん、

# 英和工學辭典

譯語の精熟なること半平として動かすべからず、工業に於ける邦譯術語の統一は本書によりて成就せられんとす、真に斯界の指南車なり、工學の書を讀む者本書を手にし、さすれば五里霧中に彷徨せん。

東京帝國大學教授 工學博士 廣井 勇氏著

# 再訂築港

前編：總叙○港灣の調査○海理○工學用材○工學用機械及工場○防波堤工事○護岸及防砂工事○浚渫工事  
後編：船渠○繫船岸○陸上設備○修船渠○河口改良工事○大船運河○船路標識○港政

內務省 工學博士 岡崎文吉氏著

# 治水

目次 摘要 第一編 總論：第一章 河川の成因○流量○河水と森林との關係○河川の荒廢保護治水の目的○第二章 河川の管理○第三章 治水工事の實例○根本義沿革及び最近の理想 ○第二編 一般の河工：第一章 河工の定義○分類及び理想 ○第二章 原始的河川○第三章 原始的河川に於ける天然狀態の保存○第四章 河川の平衡狀態○第五章 河川氾濫に關する理論及其應用○第六章 治水工事

東北帝國大學 工學博士 鶴見一之氏著

# 下水道

目次 第一章 完全下水道築設ノ必要 第二章 下水道方式 第三章 設計 第四章 下水渠施工及び各部構造 第五章 下水渠ノ清掃 第六章 邸宅地ノ排水 第七章 下水ノ處分 第八章 保留法及び小規模下水道 第九章 塵芥ノ處分 第十章 工費 附錄 一、都市築造論 二、道路面地下埋設物ニ就テ 三、下水道法 四、尿管ニ就テ

丸善株式會社發行工業書目

工學博士 栗原忠三氏著 <b>水力事業論</b> 正價金壹圓六拾五錢 郵稅金拾貳錢	工學博士 田邊朔郎氏著 <b>水</b> 正價金壹圓八拾錢 郵稅金拾貳錢	工學士 龜見一之氏共著 <b>土木施工法</b> 正價金貳圓五拾錢 郵稅金拾八錢	工學士 關場義樹氏編 <b>橋梁仕樣書</b> 正價金壹圓貳拾錢 郵稅金拾貳錢	原田碧氏編纂 <b>實用鐵筋コンクリート構法</b> 正價金貳圓貳拾錢 郵稅金拾貳錢	林學士 石丸文雄氏著 <b>土木應用力學</b> 正價金貳圓 郵稅金拾貳錢	工學博士 內丸最一郎氏著 <b>改蒸汽</b> 正價金四圓 郵稅金拾八錢	工學博士 內丸最一郎氏著 <b>改蒸汽タービン</b> 正價金四圓 郵稅金拾八錢	工學博士 內丸最一郎氏著 <b>蒸汽機關</b> 正價金參圓 郵稅金拾八錢	工學博士 內丸最一郎氏著 <b>改瓦斯及石油機關</b> 正價金貳圓八拾錢 稅金拾貳錢	工學士 瀧口三雄氏著 <b>獨英電氣工學辭典</b> 三五判洋裝全一冊 正價金貳圓 郵稅金八錢	工學博士 荒川文六氏著 <b>再電氣工學</b> 上卷金參圓參拾錢 中卷參圓七拾錢 下卷金四圓 郵稅各金拾八錢	海軍機關中佐 中條清三郎氏著 <b>電氣計算法</b> 正價全參圓參拾錢 郵稅金拾八錢	工學博士 細井岩彌氏編 <b>金鑛製鍊法</b> 正價金參圓參拾錢 郵稅金拾八錢	工學博士 倭國一氏著 <b>鐵と鋼</b> 正價金參圓參拾錢 郵稅金拾八錢	工學博士 今泉嘉一郎氏 工學博士 香村小鐘氏共著 <b>改鑛山測量術</b> 正價金貳圓參拾錢 郵稅金拾貳錢	工學博士 田中芳雄氏 工學博士 安藤一雄氏共著 <b>最工學工業試驗法</b> 正價金參圓參拾錢 郵稅各金拾八錢	工學博士 丸澤常哉氏譯 <b>化學の原理</b> 正價金參圓 郵稅金拾貳錢	工學博士 喜多源逸氏著 <b>近工業藥品製造法</b> 正價金四圓參拾錢 郵稅金拾八錢	工學博士 加藤與五郎氏著 <b>化學工業大要</b> 正價金壹圓六拾錢 郵稅金拾貳錢
---	--	--	---	--	---	--	--	---	---	---	---	---	--	---	--	--	---	---	--

365  
93

終